

# 生きられる都市空間の近代 —スペイン・ウエスカ市における「表象の空間」に関する人類学的考察—

竹 中 宏 子

## 1. はじめに

### 1.1 問題の所在

本論は、歴史的重層性をもつ都市空間に対して住民がどのようなイメージを抱き、そうしたイメージが歴史的にどのようにつくられてきたかという過程をスペインのウエスカ市を事例に考察するものである。別の目的で当市の調査を行っていた際に、インタビューや日常的に交わされる会話を通じて既存の地図や単純な観察からだけでは把握し得ない人々の都市空間の認識のし方に気づいたことが、本研究を始めるきっかけとなっている。ここでは地理学、歴史学、社会学、建築学などの研究を参照しながら、筆者が主に依拠する文化人類学的視点から都市空間へのアプローチを試みる。

イギリスの人類学者リーチは、現代都市の景観は人工的につくられたものであり、個々の構成要素の命名により、都市空間の象徴的秩序化が図られていると述べている（リーチ 1981:71-73）。都市空間が人文諸科学のさまざまな視角から議論されて久しいが、人類学の分野からは構造人類学が空間の観察方法に及ぼした影響は特に大きく、都市空間を器として捉えるそれまでのイメージに転回をもたらし、同空間を諸関係が織りなすシステム（能記signifiant）として考察する視点を可能にした（ショエ 1985:47）。これはレヴィ＝ストロースによるボロロ族の村落に関する研究<sup>1)</sup>を端緒とするが、これは単なる個別事例研究から脱して人間の定住形式一般に敷衍して考えることが可能である。構造人類学以前の都市空間に関する研究では、人類学的な視点が初期シカゴ学派の研究に取り入れられており、現代都市のさまざまな場所でみられる多様な人々と生活環境との結びつき、そして彼らの集合的心性の編成のあり方が詳細に記述されてはいた<sup>2)</sup>。構造人類学からの空間へのまなざしの転回に関して吉見は、『空間』が観察

のフィールドという意味を超えて理論的に洞察され」ようになったと指摘している（吉見 2002:51-52）。

このような空間の捉え方は、そのハードウェアからみれば、記号論的あるいは象徴人類学的な空間分析につながっていく。都市には様々な施設や建造物が集中しているため、これらが有する記号性と象徴性への注目は都市を解き明かす一つのアプローチを可能にする。つまり、都市を「読まれるべきテキスト」として理解するのである。この視点に先駆けてリンチは、都市計画の立場からボストン、ジャージー・シティ、ロサンジェルスを取り上げ、都市のイメージは「パス」(paths)、「エッジ」(edges)、「ディストリクト」(districts)、「ノード」(nodes)、「ランドマーク」(landmarks)<sup>3)</sup>の5つの要素によって構成され、これら相互の結びつきにより都市の全体像が築き上げられていると論じた（リンチ 1968:17-114）。後にバリが、リンチと同様の方法で、街路、建造物、川、橋、丘、塔、城壁などの都市象徴に焦点を据えて研究され（樺山 1984）、ワシントンD.C.に関しては建造物が表象する歴史性から都市の構造分析が行われた（奥出 1987:82-89）。カメルーンのフンバン、ガーナのクマシなどのアフリカの王都にみられる王制あるいは首長制と政治的・経済的・宗教的な施設の配置との構造的な関係や、そこで捉えられる都市住民の空間認識を考察した研究もある<sup>4)</sup>。日本でいえば、金沢を例に現代の都市社会における他界観に注目することで、都市の民俗的心意空間が明らかにされた（小林 1984:206-213; 小林 1990:67-82）。これらは都市の象徴人類学と呼び得るものであり、かなり広範に適用されてきた都市分析の方法である。

しかし、都市の記号論、象徴論またはテキスト論的分析では分析者の外部からの一すなわちエティックな—視点のみからの解説に陥り、空間を実践する主体の問題—すなわちエミクな側

面一、あるいは主体の実践そのものはほとんど等閑される危険性を伴っている。空間は所与に存在しているのではなく、人々の身体的な実践を通して初めてその存在がみとめられるといっても過言ではないだろう<sup>9)</sup>。したがって、たとえ都市や村落といった空間が言説であり解読可能なテキストであったとしても、その作者は誰なのかが大きな問題であって、さらにそれぞれの空間がいかなる社会的な文脈におかれ、どのような集会的実践と結びついて生産され、受容されているかに十分な注意が向けられ、歴史的動態として記述されるべきなのである(吉見 2002:52-53; 吉原 1987:35-40; 和崎 1987:54)。

これらの議論を踏まえて、本論ではウエスカを事例に住民の言語行為や日常生活における参与観察から彼らが抱く都市空間のイメージの把握を試みる。そこでは行政あるいは教会側から与えられた公的な都市区分と関係する2つの空間に着目する。詳細は後述するが、一つは「古くて新しい」と概念付けられる旧市街地で、もう一つは工業化に伴う人口流入によって形成され、町の東の周縁に位置するバリオ (barrio)<sup>6)</sup>である。これらの空間の特別な意味を都市全体との関係から、フィールドワークを通じて抽出するのである。これは単なる都市空間に関する構造分析ではない。ルフェーヴルが論ずるところの「表象の空間」<sup>7)</sup>という空間認識の方法概念と通ずるところがある。この概念を用いる場合、「空間の表象」をも問題にすることが要求されるであろうが、本論では触れないことを予め断っておきたい<sup>8)</sup>。また、本論では時間軸も挿入する。歴史的な視点から、実在する都市空間と現在人々が抱く同空間のイメージとの関係を明らかにするのである。つまり本論では、あくまでも都市住民の行為や実践を基に、現在の視点と歴史的な視点の両方から都市空間を把握していくのである。

## 1.2 都市空間に関する人類学的な先行研究—スペインについて—

スペインにおける都市空間研究について語る場合、空間および都市に着目した人類学的な研究の始まり自体がそれほど古い話ではないことを念頭に入れる必要があるだろう。マルティネス (Martínez 1991:195-255) の「空間の秩序化と知覚」と題された1991年の論文では、「スペインに関す

る都市人類学的研究あるいは都市研究は非常に限られていて、その観察が純粋な習俗主義 (costumbrismo) を越えるものではない」<sup>9)</sup>との指摘がみられる。同論文では村落空間、移民の空間、都市空間の3タイプの空間に分けて研究の動向と問題点が詳細に述べられている。それに続けて空間の各タイプの具体的な研究として2~3の関連論文が寄せられているが、他のタイプと比較して都市空間に関してはプレス (Press 1991:308-323)<sup>10)</sup>と、ケニーとニップメヤー (Kenny & Knipmeyer 1991:324-342)<sup>11)</sup>のアメリカ人によって書かれたものだけであり、内容自体は既に1970年代あるいは80年代に英語で発表されたものであった。ここから、スペイン人研究者による都市空間への人類学的なアプローチが未だ成熟していなかった状況がみとめられる<sup>12)</sup>。

しかし、当時からスペイン人研究者のまなざしは徐々にではあるが都市空間へ向けられていた。1990年にはアンダルシアの小都市カサラボネラ (Casarabonela) の空間に関する研究が既に出版されていた (Sánchez 1990)。これは丹念なフィールドワークを基に、家、近隣関係、バリオ、集落、地理的環境を通して見られる男性と女性の様々な行動の相違から、男性、女性あるいは両者の相互関係に基づく象徴世界を描き出した意欲的な研究である。しかし、どちらかと言えば構造主義的な分析からの空間認識を抽出した研究と言えるだろう。また、1993年には若手の研究者らによって『空間と文化』(Lisón (ed.) 1993) と題される論文集が出版されている。同書刊行には、外国人による多くのスペイン研究はあまり納得がゆくものではないが、スペイン人自身による人類学的な著作は少ないという状況を克服する意図があり (Lisón 1993-a:7)、空間をテーマにした様々なフィールドの事例研究が集められている。ここでは空間に関する著者同士のコンセンサスや理論・方法論的視座は明示されておらず、象徴論的な分析から住民の言説を不断に用いて考察された研究まで千差万別で評価が難しい。

このような経緯を踏まえて結実したものが次の2冊で、都市の研究としてスペインの人類学界においては画期的なものであったと考えられる。一つはウエスカ県に位置する小都市バルバストロ (Barbastro) を調査・研究したマイラル著『ある都市の人類学—バルバストロ—』(Mairal 1995)

で、もう一冊はカスティーリャ地方の都市アビラ(Avila)を扱ったカテドラ著『一つの町に一つの聖人』(Cátedra 1997)である。

前者は、都市を日々生きたり感じられるものと捉え、現地での長期のフィールドワークで行われた参与観察とそこで得られた住民の言説を基にバルバストロを全体的に把握している。大都市—特に急成長を遂げた大都市—とは異なり、小規模都市のバルバストロでは、都市的な混沌の中にも家、通り、バリオ、教会区、近隣組織、祭り、町のアイデンティティの象徴などに根ざした伝統によって支配される秩序が見出せるとし、多数の公共空間(los espacios públicos)とその歴史、そしてそこに生きる人々の生活が織り成す都市の全体像を描き出した。マイルールのような都市を成り立たせている可視的な建造物や不可視的な区画に焦点を据えた分析のし方は、スペインの都市に限らず村落空間の研究においても一般的にみられるものであり、スペインの町や村の空間を考察する有効な方法であると考えられる。本論でも都市を人々によって生きたり感じられた空間として捉える立場をとり、先に挙げたバリオや教会区などの区画的な分析単位も考慮に入れてウエスカを考察する。

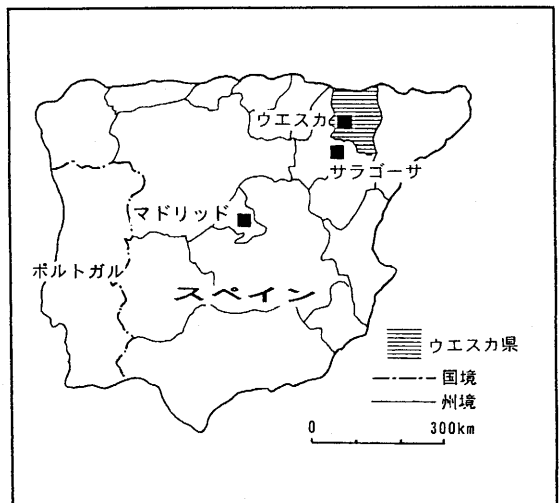
後者は、アビラが象徴的にどのように構築されたのかを、守護聖人の創造の過程を通して歴史的に考察した研究であり、地域の伝統に基づきながらも「新しい」聖人の創造が、都市における多様な集団によって実践されるポリティクスに関係している点を明らかにしている。そこでは「スペイン」という枠組みを基にしたより広範な文化との関係を考慮に入れながら、歴史的、政治的および文化的なコンテキストとして都市が探究され、都市を一つのフィールド、研究単位としてみなす視座が明らかに示されている。この研究は直接都市空間を扱ったものではないが、本論ではカテドラのポリティクスの視点を参考にし、先に挙げたバリオや教会区などの空間の分析単位と住民の生活の実践との動態的な関係を歴史的に考察する。

ウエスカの都市空間に関する先行研究としては、リソン(Lisón)が先に挙げた論文集の中で既存のバリオの成り立ちを歴史的に概観し、バリオの住民としてのアイデンティティを近隣組織や祭りを通して考察する試みを行っている(Lisón 1993b:91-120)。この論文は筆者の研究に大いに参考

になったが、見解が異なる部分もまた多い。特に、リソンは住民の空間認識としてバリオの境界線がくっきり引かれていて、バリオ住民としてのアイデンティティも厳然として存在している「事実」を基に論文を構成しているが、筆者はその「事実」自体に疑問を投げたい。したがって本論では、ウエスカにおけるバリオの存在の重要性を充分考慮しながら、その境界を越える、あるいはバリオ内に創造されるような人々の空間のイメージを捉える試みを行う。また、異なるバリオ間の境界線が強く意識されている場合、それは単に本質的に備わっているものではなく、歴史的に、そして市当局との関係から生じる住民のポリティクスの実践を通して創造されるものであることを明らかにする。

## 2. 現在のウエスカの都市空間(1): 観測者の眼から捉えたウエスカ—都市の記述とイメージ図—

アラゴン自治州・ウエスカ県の県都であるウエスカ市は、スペインの首都マドリッドから北東に約300km、アラゴン州の州都サラゴサから北北東に約70kmのところに位置している(地図1)。47,609の人口<sup>(13)</sup>と6,370m<sup>2</sup>(都市部)の面積を有する小都市で、住民の多くは第一次、第二次産業よりも第三次産業に従事している<sup>(14)</sup>。「閑静な町並み」というのがこの町の通常的印象で、マドリ



地図1: イベリア半島におけるウエスカの位置

ッドやサラゴサのような大都市にはないゆったりとした住環境と生活に必要な施設が大方整っている。

町の外から眺めると、小高い丘が際立ち、その上に大聖堂が聳え立って見える。この丘全体の面積は2,200m<sup>2</sup>。中世にイスラム教徒によってつくられた城壁に囲まれていた城壁内街区で、最も高いところで海拔488mある。かつての城壁は現在ではほんの一部しか残っておらず、町のメインストリートである「コソ通り」<sup>15)</sup>に姿を変えてしまった(地図2)。旧城壁内には大聖堂と市庁舎を初めとして、12世紀のアラゴン王の王宮、9世紀から11世紀のイスラム統治下でキリスト教徒の拠点となった聖ペドロ教会、17世紀末から18世紀初めに建築された八角形の建造物である大学など、ウエスカ市における地域の文化遺産が最も集中し、歴史性と宗教性が最も凝縮しているところである。現在では修復が始められた建造物も見られるが、老朽化が進行している建物も少なくない。車両交通には不適な非常に幅の狭い通りが、広場(plaza)間を結ぶ形に張り巡らされている。歴史的建造物の保存と現住民の居住空間としての環境が整えられていないことが旧城壁内街区の大きな問題で、ウエスカの社会問題としてもしばしば議論されているという。しかし、大聖堂の位置を基準にして東側の部分が西側よりすさんだ外観を呈した建物が多いと感じられる。

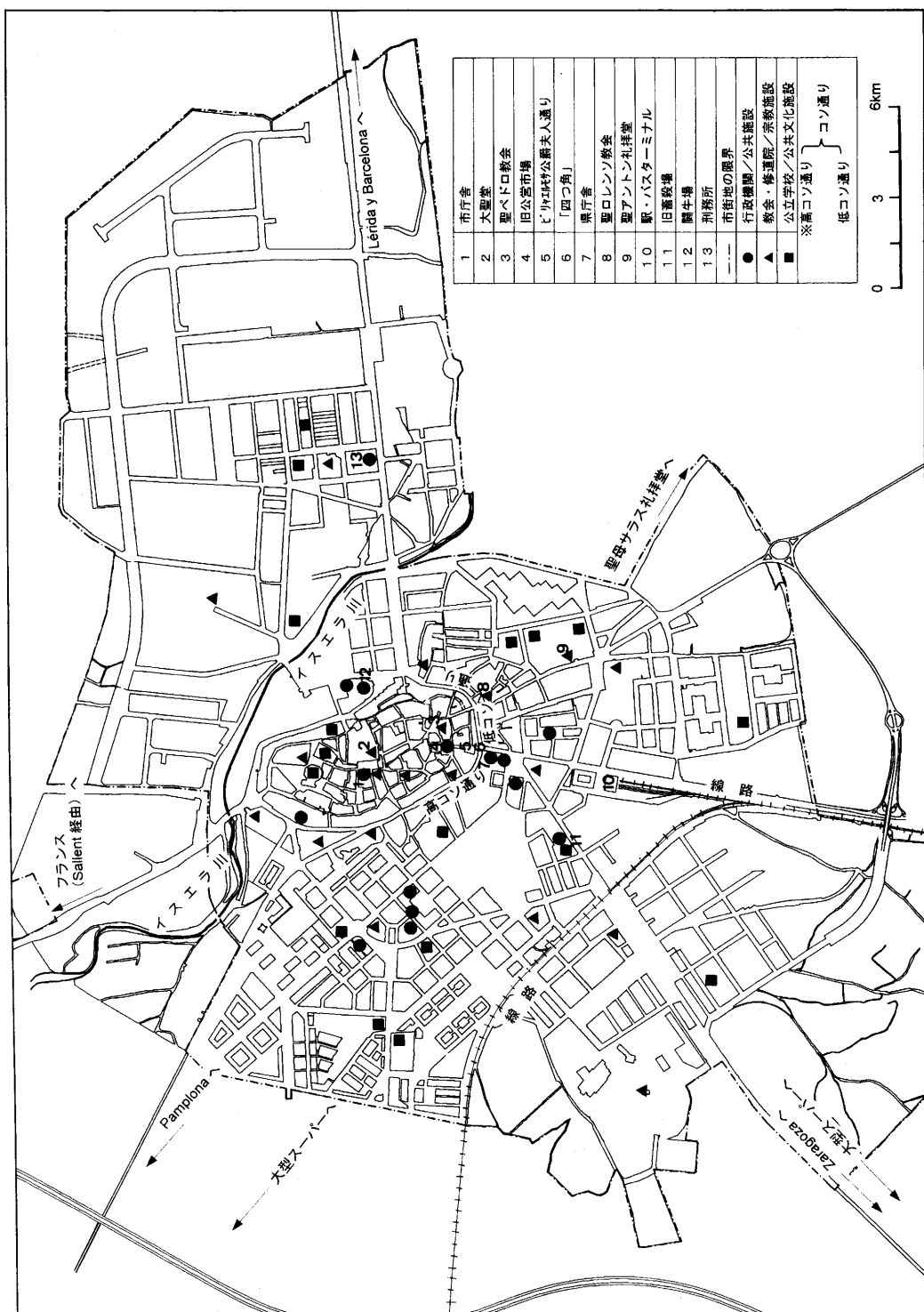
旧城壁からかつての土壁<sup>16)</sup>までの空間—つまり城壁外の南に広がる扇形の空間—と、城壁の外の西側の狭い範囲が歴史的な城壁外街区である。ここにはかつて豚の畜産市が定期的に行われていた広場<sup>17)</sup>や「菜園通り(calle de las Huertas)」、「花通り(calle de Flores)」など農業や植物に関係のある名称をもつ通りが多くみられる。豚、牛、驢馬などの農耕用動物の守護聖人である聖アントン(San Antón)が祀られた礼拝堂もある。これらのことから、この地区は農業と深い関わりをもっていたと推測される。現在でも古い家屋が多く、それらは家畜の飼育場や仕事場として使用していた中庭(patio)をもち、農業を営む家の象徴でもある「騙し扉(puerta falsa)」<sup>18)</sup>が備え付けられている。この街区と城壁内街区を合わせた空間が、いわゆる旧市街地に分類されている<sup>19)</sup>。

旧城壁外街区には皮職人や鉄加工、家具などの小さな工場も残っている。かつての城壁で現在の

メインストリートである「コソ通り」により近く、且つより西側の部分には商店が立ち並んでいる。そこ以外の建物は、旧城壁内街区と同様、老朽化が目立ち、居住者の高齢化も問題となっている。先に挙げた聖ロレンソ通りとその周辺にもかなりの数の古い建物がみられ、昼間はそれほど多く人が行き通うところではない。ところが週末の夜になると、そこは一変して酒場と化す。バー(bar)<sup>20)</sup>やディスコ・バー(discobar)<sup>21)</sup>が集中している地帯なのである。この盛り場の地帯は、聖ロレンソ通りから旧城壁内に位置する大聖堂近くまで達している。

ウエスカの都市全体の形状は、かつての城壁に囲まれた楕円型の空間から放射線状に広がっているが、北と南東への広がり方は少ない。それは、楕円型の旧城壁跡のすぐ北側にはイスエラ川(río Isuela)が迫っているからだと考えられる。新市街地は、先に述べた旧市街地全体を包むように広がっている。建設された時代によって建物の高さやスタイルは異なるが、一般に旧市街地の建物よりも高くエレベーターが設置されているものがほとんどで、採光が配慮された近代的な構造で建設されている。通りも車両の通行を前提にして旧市街地と比べて幅広くつくられていて、直線的で、ほぼ碁盤の目状に整備されている。広場も割合に大きく、旧市街地にはない並木通り(avenida)や公園も新市街地にはみられる。他地域とウエスカを結ぶ交通の窓口である鉄道の駅とバスターミナルは、旧市街地からそれほど離れていない新市街地内にある。

都市の区画整備の面あるいは建物の概観からは、どこから郊外が始まるのかを即座に把握することは難しい。それでもここに明らかな「境界線」が2本みとめられる。一つはイスエラ川で、もう一つは鉄道の線路である。イスエラ川から町の外に向かってバリオ「永遠救済のマリア(Nra. Sra. del Perpetuo Socorro)」が広がり、線路を越えると「権現のマリア(La Encarnación)」というバリオになる。中規模以上の工場や倉庫などは、この2つの「境界線」の外のバリオ内に位置している。住宅と工場の他に目立つ施設は、大きな病院<sup>22)</sup>と大型のスポーツ施設である。注目すべきは、「権現のマリア」<sup>ラ・エンカルナシオン</sup>には近年流行の大型スーパーがあるのに対し、「永遠救済のマリア」<sup>ベルベトウ・ソコロ</sup>には存在しない点である。「永遠救済のマリア」<sup>ベルベトウ・ソコロ</sup>内に位置す



地図2：ウエスカの主な宗教施設、行政施設の分布

る特徴的な施設は、病院の他には、刑務所が挙げられるだろう。

以上のような観察を基にイメージ化したものが、図1になる。次節ではこの図についても触れながら都市空間をウエスカの住民の視点から考察してみたい。

### 3. 現在のウエスカの都市空間 (2) : 住民が捉える都市空間のイメージ

#### 3.1 公的な空間区分と住民が使用する地図にない地名の検討を通して

前項で記述された都市空間は住民にとっては日々の生活の場であり、同じ場所でも異なる意味を呈するであろう。例えば特に観光客のような外部者にとっての観光すべき教会は、住民にとっては毎日のミサやカトリック教育を受ける場であり、聖体拝領や結婚式などの人生における通過儀礼の場でもある。つまり、一つの場がそこに関わる人によって両義的あるいは多義的な特徴をもつことになる。

ここで図1のイメージ図を住民の視点から検討

する意味で都市の中心がどこにあるかを考えてみたい。図1では、旧城壁内に位置する市庁舎と大聖堂が中心的な位置を占めている。確かに市庁舎は行政的に都市を統括する象徴的な場で、また、大聖堂は教会権力のシンボルであり、位置的にも両者が小高い丘の上にあることから、ここが町の「中心」と捉えることは可能であろう。公共料金の支払いにも、生活上の不平等や要求の訴えあるいは相談にも人々は市庁舎を訪れ、宗教生活上の重要な問題は、大聖堂周辺に位置する関係諸機関で解決される。したがって、市庁舎と大聖堂はある意味で町の中心であると理解して間違いはない。

しかし、ウエスカの住民は「町の中心はどこか」という質問に対してはほぼ異口同音に「四つ角 (Cuatro Esquinas)」と答える。市役所の職員も、信徒団に所属し毎週末ミサに通うような敬虔なキリスト教徒も、そう回答する。この名称は地図には載っていない現地の人々の間のみで用いられる語彙で、ウエスカの住民であれば知らない者はいない。ここを「ウエスカの臍 (el ombligo de Huesca)」と呼ぶ人もいる。「四つ角」は文字通り4つの通りが交わる点で、メインストリートであ

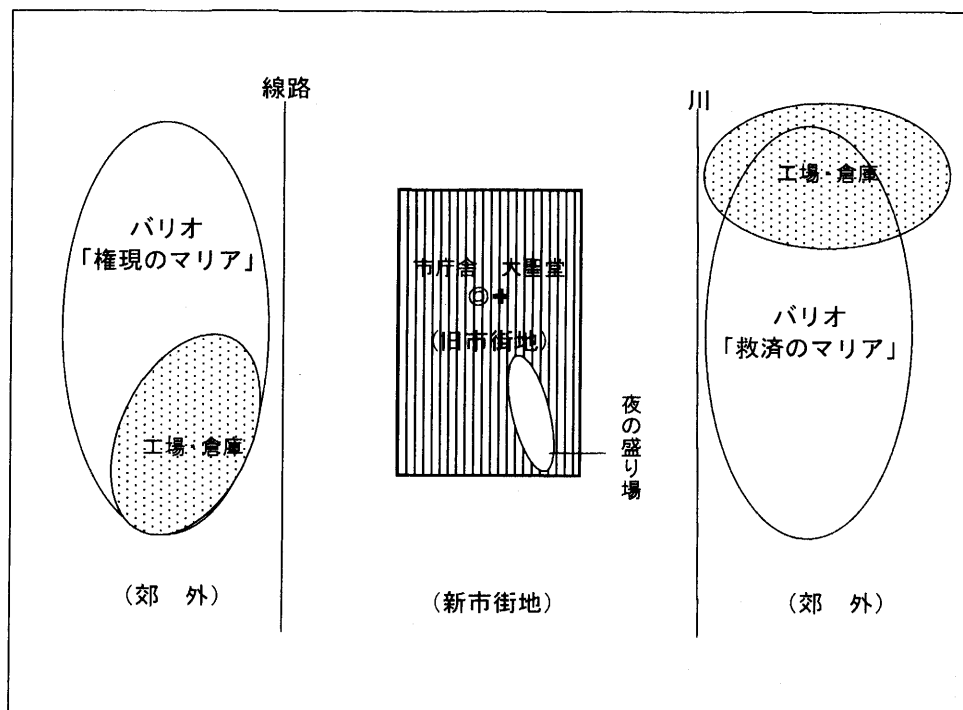


図1 観察者の眼で見た現代ウエスカのイメージ図

る「高コソ通り」と「低コソ通り」の起点でもある。その周辺には多くの店が立ち並び、レストランやバーは典型的な待ち合わせの場所にもなっている。

次に、旧市街地について考察してみたい。ウエスカの住民と話をする、旧市街地について彼らの間で幾つかの特別な呼び名があることに気づく。まず、旧城壁内街区のことは一般に「歴史的な街区 (Casco Viejo)」と称される。この語は辞書では旧市街地をも意味するとされている。したがって市行政の建築や都市計画の側から定義される「旧市街地」と区別するために本論では「歴史的な街区」の語を採用する。

「歴史的な街区」内部には夜の盛り場があることを前節で述べた。そこは大聖堂に通ずる地帯であることから「大聖堂」と呼ばれる。旧城壁外街区にあるウエスカのもう一つの盛り場は、通りの名から「聖ロレンソ」と称されている。例えば「週末はどこで一夜を明かしたか」という質問に対し、「最初は大聖堂の『ハバナ』にいたけど、その後聖ロレンソに移動した」というような会話が成立する。

「聖ロレンソ」を含む旧城壁外街区には農業との深い関わりを感じさせる通りの名称や家屋が残っていることは既に述べた。ウエスカの住民にこの地区のことを尋ねると「農業従事者が多く住んでいるところだ」という回答が多く、町で名の通った農業従事者は現在そこに住んでいなくても、同街区の住人であると信じられている。年配者になるとどの通りに誰の農家があったのかを詳細に述べることができる人もいる。しかし、実際にはこの地区には商店と小さな工場も並立している。ここからウエスカの住民によって同区は、歴史的記憶として形成された農業に関連する場というイメージが抱かれると同時に、夜の盛り場として生きられているとみて間違いなさだろう。

ところで、都市は自然環境や建造物の配置のみから成立しているのではなく、視覚からは捉えられない行政的あるいは宗教的な区分も住民の生活や彼らが抱く都市のイメージに反映されていると考えられる。ウエスカ全体の空間にも行政的、宗教的な都市空間の区分が幾つか存在している。

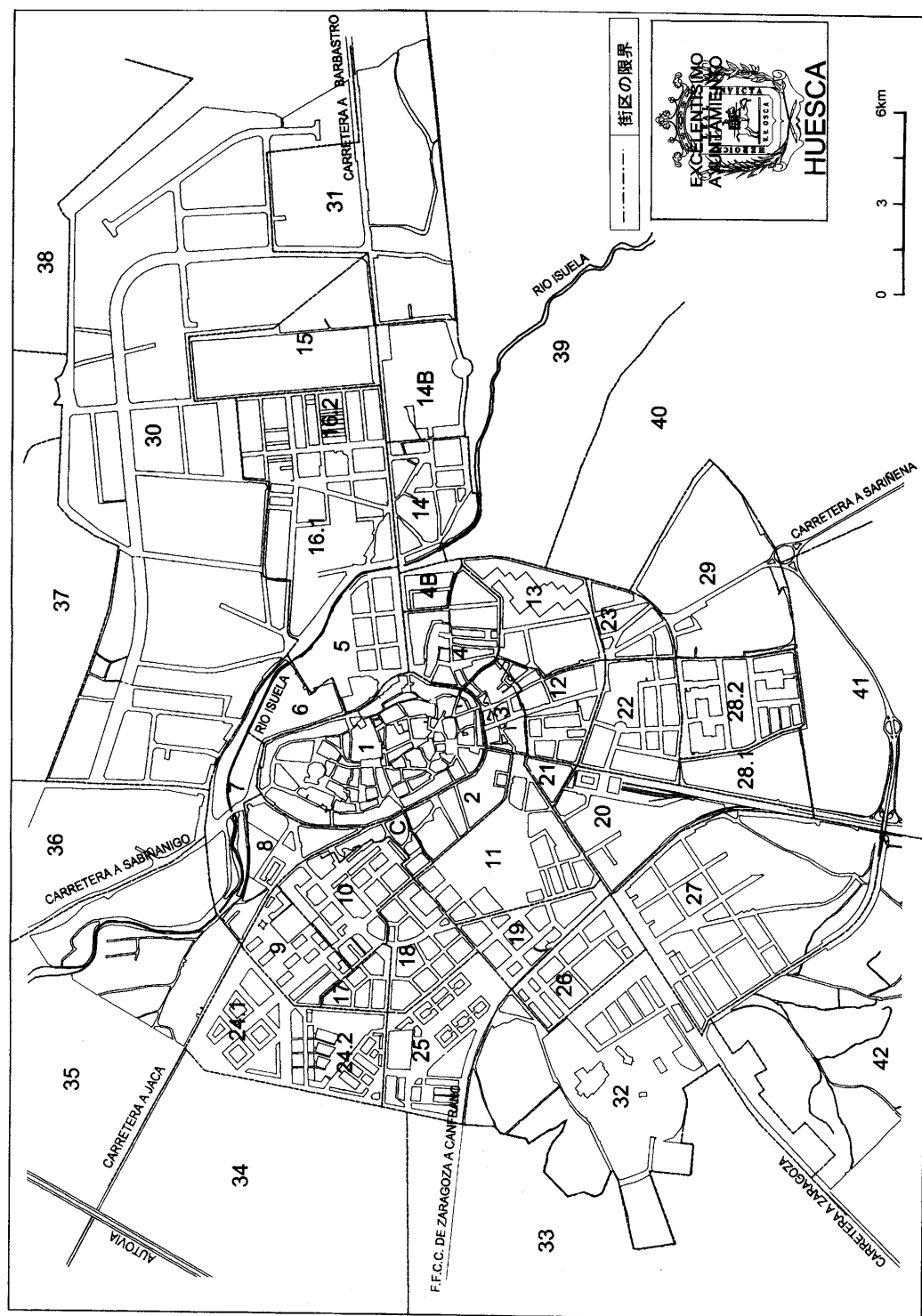
まず、宅地、工業用地など使用目的があらかじめ決められた都市計画の区画 (polígono)<sup>23)</sup> (以下、ポリゴノ) によって分けられている (地図3)。

そして、ある一定の人口以上をもつ地区を「セクション (sección)」、セクションの幾つかの集まりを「区 域 (distrito)」とする区分もある (地図4)。これは統計調査や選挙のときに用いられるものである。これらは普段の生活では直接知覚し得ない区分であろうが、ポリゴノの方は間接的に特別な「空間」を創り出す場合がある。それは、用途を宅地と決められたポリゴノに入った業者がそこを高級住宅地として売り出すと、後にそのポリゴノはブルジョア的な一つの「バリオ」<sup>24)</sup> と認識される場合である。そのイメージが定着すると名称を聞いただけで位置がわかり、住人は経済的にも社会的にも恵まれたイメージをもたれ、一般に「いいところ (buen sitio) に住んでいるね」と褒められる。当然、住人も好意的なイメージを誇りに思うので、このような「バリオ」は他者からのみではなく住人自らもその存在を強調するような特徴を帯びている。筆者が行ったフィールドワークからは、「オリーブ畑 (los Olivos)」、「ポリゴノ 25 (Polígono 25)」、「ピレネー (los Pirineos)」、「聖ホルヘ (San Jorge)」の4つの「『バリオ』=ポリゴノ」が確認し得た<sup>25)</sup>。

日常生活の上で重大な関心事の一つが健康の問題である。スペインでは国による医療サービスを受ける場合、住所によって決められた公共医療施設 (centro de salud) の医師にかかるシステムになっている。ウエスカにはこのような施設が3つ存在している<sup>26)</sup> (地図5)。これらの施設の他により設備の整った公立の「聖ホルヘ病院」と私立の「聖サンティアゴ病院」があるが、先に挙げた区分とは関係がない。

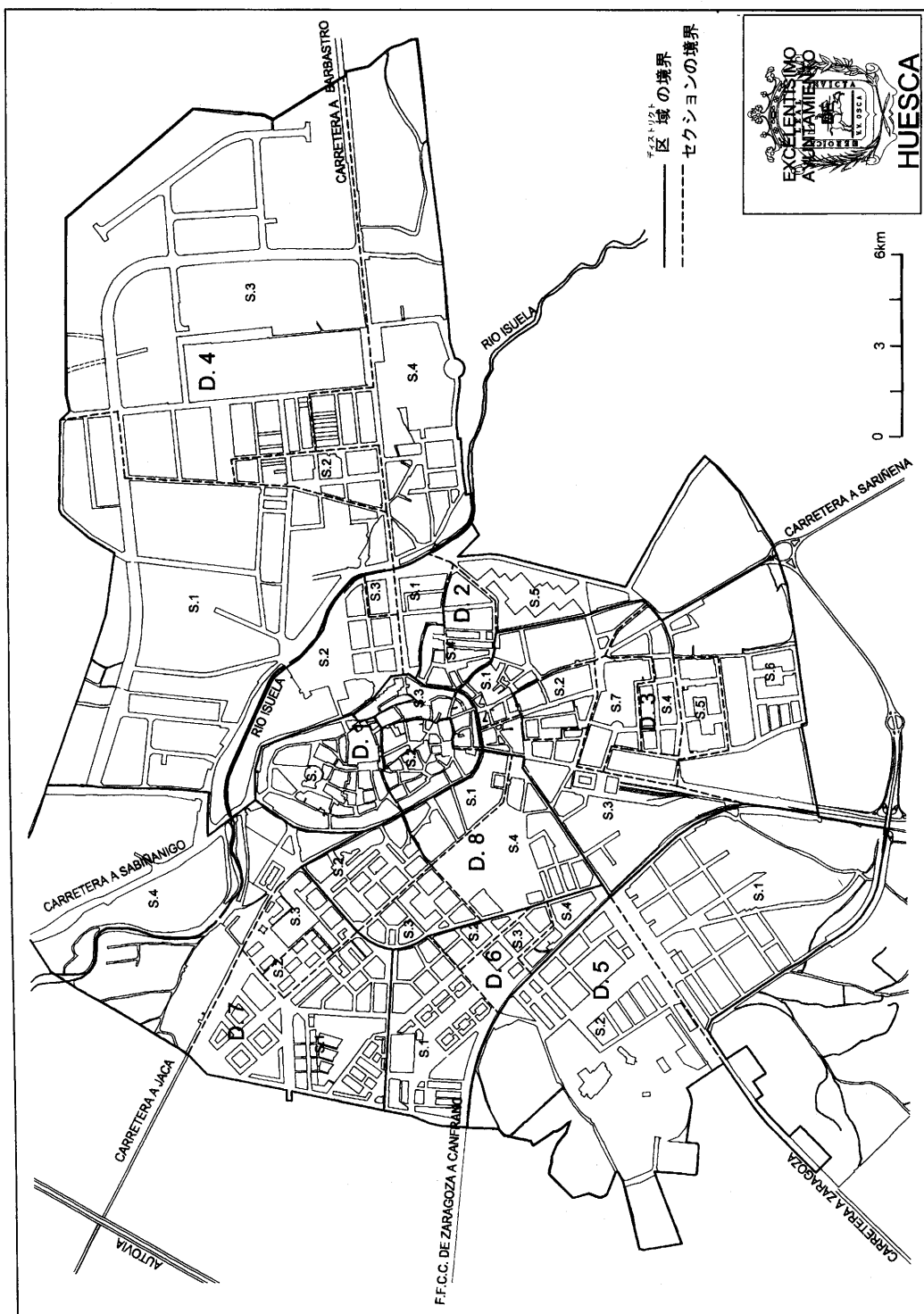
6才から12才までの義務教育 (基礎一般教育 EGB) でも学区区域が決められていて<sup>27)</sup>、越境して通学する場合には理由書の提出が求められている。基礎一般教育が受けられる公立の学校はウエスカには7つあり<sup>28)</sup>、したがって7学区域に分けられている (地図6)。

宗教上の問題に関する相談や子どもが特別にカトリック教育 (catequismo) を受ける際に関係してくるのが、教会区の教会である<sup>29)</sup>。ウエスカには「大聖堂 (La Catedral)」、「聖ペドロ (San Pedro)」、「聖ロレンソ (San Lorenzo)」、「聖ドミンゴー聖マルティン (Santo Domingo y San Martín)」、「聖サンティアゴ (Santiago)」、「権現 (権現) のマリア」、「聖母アウキシリアドーラ (María

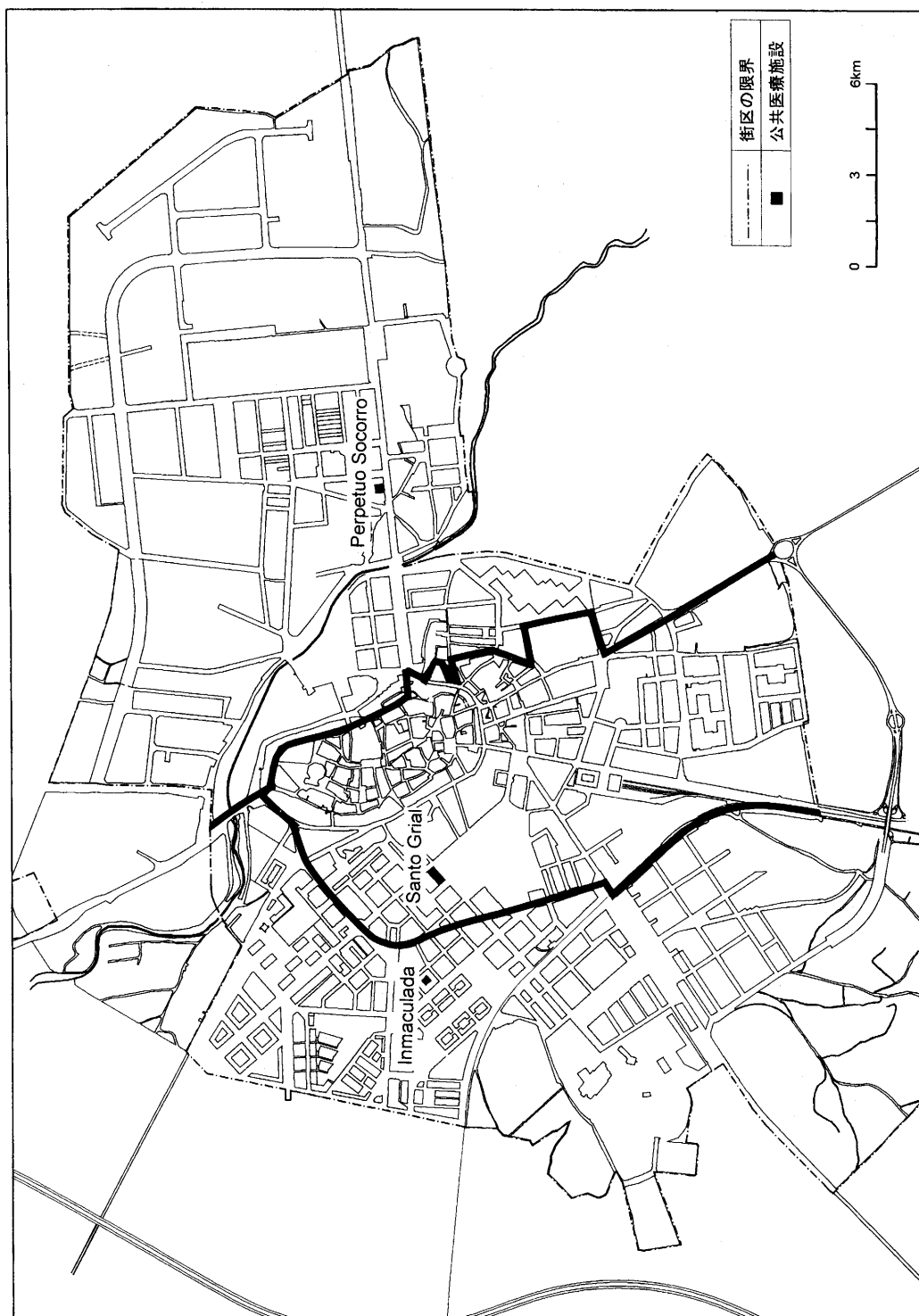


地図3：ポリゴノの区分

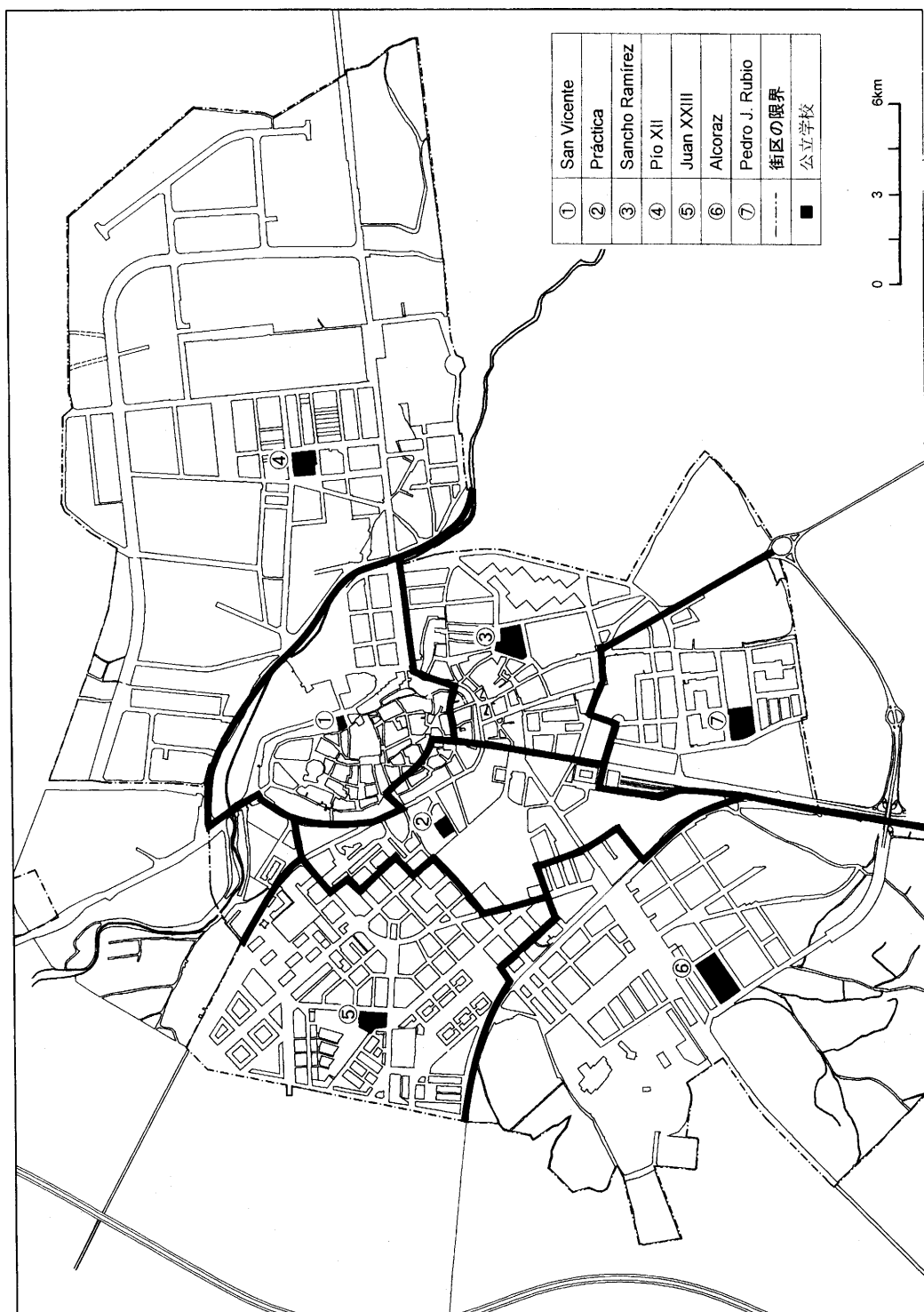




地図4：区 域とセクションの区分



地図5：公共医療施設の区分（行政資料より筆者作成）



地図6：学区の区分（ウエスカ市教育委員会資料より筆者作成）

Auxiliadora)」、「<sup>ベルベトウオ・ソコーロ</sup>永遠救済のマリア」、「聖ホセ (San Jose)」の9つの教会区が存在している。最初の4つは非常に古く、起源は明確にはわかっていない。ただ「聖ロレンソ」と「聖ドミンゴー聖マルティン」が城壁外街区の形成に伴い13世紀につくられたと推測されているだけである。その他は20世紀の人口増加に伴う都市空間の拡大とともに設定された教会区である。「永遠救済のマリア」は1965年に、「聖サンティアゴ」は1968年に、「権現のマリア」は1972年に、「聖母アウキシリアドーラ」は1980年に、「聖ホセ」は1982年に定められた。ここから、現在に至るウエスカの都市空間の拡大は1960年代から始まったことがわかるだろう。

これらの教会区は名称もスケールもバリオと同じもので、ウエスカの場合「バリオ＝教会区」という図式が成り立つ<sup>30)</sup> (地図7)。バリオの自治的な近隣組織<sup>31)</sup>も1973年の「<sup>ベルベトウオ・ソコーロ</sup>永遠救済のマリア」における結成を皮切りに、「<sup>ラ・エンカルナシオン</sup>権現のマリア」では1974年に、「聖ドミンゴー聖マルティン」では1976年に、「聖ホセ」では1982年に、「聖ロレンソ」では1985年に、「聖サンティアゴ」では1992年に、「聖母アウキシリアドーラ」では1993年に、それぞれ設立されている。「大聖堂」と「聖ベドロ」の場合は、それぞれが独立したバリオではあるが、近隣組織はこの両バリオを含む「<sup>カスコ・ビエフホ</sup>歴史的な街区」を範囲として結成されている<sup>32)</sup>。

「バリオ＝教会区」のことを、ウエスカの住民は日常の会話では普通「バリオ」と呼び、正確な境界線を示すことができなくても、9つのバリオがそれぞれ町のどこに位置しているかはおよそ把握している。したがって、ウエスカのバリオの調査を行ったリソンが述べているように、一見、人々は自分が属するバリオを中心に生活しアイデンティティを感じているという仮説が成り立つ。しかし筆者のフィールドワークでは、異なる「バリオの間で何か相違は感じられるか」という問いに対して、ほとんどの住民は「<sup>ベルベトウオ・ソコーロ</sup>永遠救済のマリア」のみを「他とは違うバリオ」として指摘し、その他のバリオに関しては「ほとんど相違はない」、または、「『<sup>カスコ・ビエフホ</sup>歴史的な街区』は歴史があって古いことは外からわかるが、住人の性格まで特徴的かどうかはわからない」という回答を得た。つまり人々の都市空間のイメージの中に、「バリオ＝教会区」の区分は「<sup>ベルベトウオ・ソコーロ</sup>永遠救済のマリア」を除いてさ

ほど強い境界を示していないのである。

以上のような住民の言説から2つのことが読み取れる。一つは、旧市街地と新市街地の区別は知覚されていて、旧市街地はさらに旧城壁内の「<sup>スロ・カテドラル</sup>歴史的な街区」、町の盛り場（「大聖堂」と「<sup>スロ・カテドラル</sup>聖ロレンソ」）、農耕と関係する旧城壁外街区として認識されていること。もう一つは、「バリオ＝教会区」における「<sup>ベルベトウオ・ソコーロ</sup>永遠救済のマリア」の特殊性である。

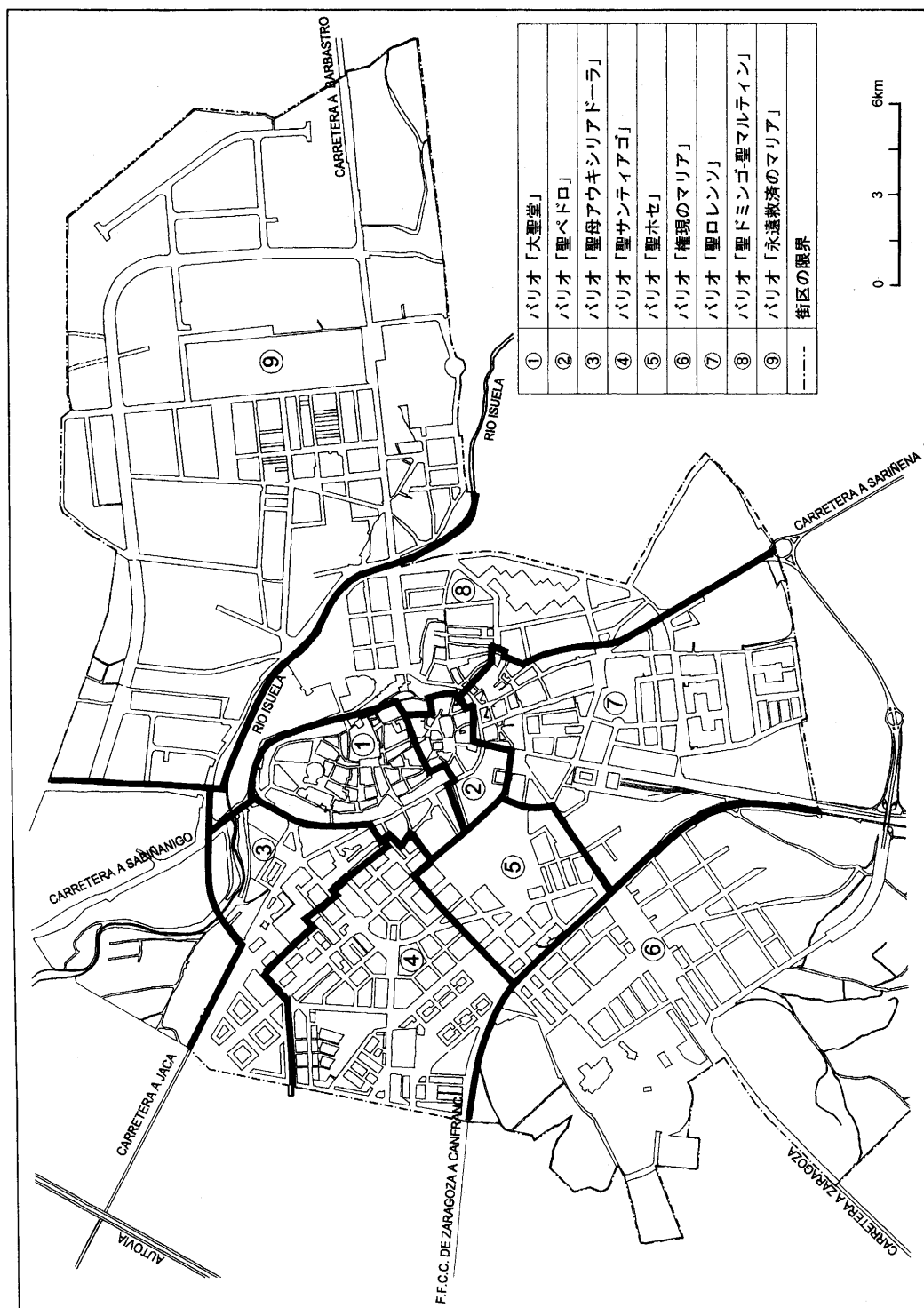
### 3.2 伝統地区の新たな形成

本項では旧市街地を取り上げて検討する。旧城壁内街区に当たる「<sup>スロ・カテドラル</sup>歴史的な街区」は文字通り長い歴史を持った空間ではあるが、この概念はそれほど古いものではなく、むしろ新しい概念である。この概念について近隣組織<sup>33)</sup>の関係者は次のように説明してくれた。

現在一般的に使われている「<sup>カスコ・ビエフホ</sup>歴史的な街区」というコンセプトは、我々が組織を立ち上げた1987年前には存在していなかった。もちろん、「大聖堂」や「聖ベドロ」などという言い方はしていたけれど、歴史的な街区である「<sup>カスコ・ビエフホ</sup>歴史的な街区」という言い方も概念もなかった。今はある。今後、これだけ一般化したこの概念を誰も問い直したりはしないだろう。

つまり、「<sup>カスコ・ビエフホ</sup>歴史的な街区」という語は2つの教会区を内包する当近隣組織の設立と共につくられた概念で、1987年以降に使用されるようになったものである。したがって、矛盾するようではあるが、旧市街地の城壁内街区はウエスカにおける新しい「バリオ」の一つなのである。

この近隣組織は、旧城壁内の活性化を目的として結成された。主に生活環境を改善し、同時に放置されたままになっている歴史的遺産の修復・保存に取り組む活動を行っている。その背景には、次のような経緯があった。「<sup>カスコ・ビエフホ</sup>歴史的な街区」に含まれる2つのバリオ — 「大聖堂」と「<sup>スロ・カテドラル</sup>聖ベドロ」 — は共通の問題を抱えていた。それは、一方で住民の人口が他のバリオに比べて非常に少ない上に高齢化の問題を抱えていることで (表1)<sup>34)</sup>、他方で旧城壁内にはウエスカの財産とも言うべき歴史的建造物が集まっているが、それらが目の前で朽ちていく現実を阻止できない苛立ちであった。その当時まで市当局はほとんど旧市街地の問題に



地図7：バリオの区分

表1 年齢別人口統計 (1996年)

バリオ名 対象年齢	大聖堂	聖ペドロ	聖ロレンソ	聖ドミンゴ 聖マルティン	永遠救済 のマリア	聖サント アゴ	権現の マリア	聖母アウキン リアドーラ	聖ホセ
合計 (人)	2543	997	8255	8456	5265	7706	3725	3144	4866
平均 (歳)	<b>43.90</b>	<b>43.78</b>	38.57	38.78	39.60	41.53	36.21	40.99	40.95
15歳以下 (%)	12.35	11.74	<b>17.66</b>	15.62	14.95	11.78	<b>18.04</b>	14.12	12.10
25歳以下 (%)	25.64	23.87	28.69	28.12	<b>30.14</b>	28.16	<b>33.72</b>	29.42	28.28
35歳以下 (%)	41.72	42.33	44.88	45.74	<b>46.34</b>	41.21	<b>48.05</b>	41.13	42.17
44歳以上 (%)	<b>47.70</b>	44.13	36.22	37.18	38.52	<b>44.68</b>	33.37	43.83	44.20
54歳以上 (%)	<b>35.90</b>	<b>34.70</b>	24.52	24.96	27.20	29.52	19.33	28.47	28.24
64歳以上 (%)	<b>26.43</b>	<b>25.78</b>	16.90	16.02	18.84	19.92	28.47	18.77	18.02

\* 〃は該当する項目の値が1位と2位の数字。

取り組んでいなかった。そこで、既存の「バリオ＝教会区」ごとに活動するのではなく、一つにまとめることが有効な手段だと考え、旧城壁内街区へ注意を促すべく、「歴史的な街区」<sup>カスコ・ビエッホ</sup>という概念が打ち出されたのである。

現在では旧城壁内街区を「歴史的な街区」<sup>カスコ・ビエッホ</sup>と称するのは一般化しているが、これは主に若者から中年層の人々の中での話である。特に年配者にとって同空間は、昔から現在に至るまで「大聖堂」<sup>ラ・カテドラル</sup>と「聖ペドロ」<sup>カスコ・ビエッホ</sup>の2つのバリオあるいは教会区であり、「歴史的な街区」は新しいコンセプトである。例えば70代の男性は次のように話す。

現在「歴史的な街区」<sup>カスコ・ビエッホ</sup>と言われるようになった歴史的な街区を、私たちは常に「大聖堂」<sup>ラ・カテドラル</sup>と「聖ペドロ」<sup>カスコ・ビエッホ</sup>と呼んできた。その街区を「歴史的な街区」<sup>カスコ・ビエッホ</sup>と呼んだことは一度も無かった。でも、そこが歴史的な街区であることは知っていた。「歴史的な街区」<sup>カスコ・ビエッホ</sup>と呼ぶようになったのは、つい最近のことだ。嘘だと思うならば私と同じ年代の人か、もっと年上の人に尋ねてみるといい。きっと同じ話をするから。

旧城壁外街区も、「歴史的な街区」<sup>カスコ・ビエッホ</sup>に類似して「新しいバリオ」に分類することが可能である。既に述べた通り、農業従事者が少ない現実にもかかわらず、さらに人々が主に夜の盛り場として利用しているにもかかわらず、同街区は農業にしているイメージが強かった。町の中心である「四つ角」に近いのだが、通常、住民は同街区にオフィスを構えようとしな。大学を出たばかりのあまり金銭的に余裕のない若者が友人同士で絵

画教室を開こうと準備していたが、「家賃が安くてもあそこでは生徒を集められない」と言っていた。また、筆者は現場を一度も目にしたことはないが、同街区では麻薬の取引が路上で日常的に行われていると噂されている。つまり、「旧城壁外街区＝農業と関係が深い地区」というイメージと矛盾していることになる。

しかしながら、かつて主要な産業であった農業が衰退してしまった現在だからこそ、伝統回帰的な意味で復興しようという動きもみられるようになってい。1990年代後半から町最大の守護聖人祭でも引退した農民が毎年表彰され、同じ頃、家畜の守護聖人とされる「聖アントン祭」が復活している。

このように、観察者の眼からは単純に「旧市街地」と一括りにされる空間にも、住民によってイメージの抱かれ方、また、生きられ方が異なる「歴史的な街区」<sup>カスコ・ビエッホ</sup>と「農業と関係が深い地区」の2つの空間を捉えることができた。人々は、実際には老朽化した建物群、あるいは犯罪の危険性がある空間と認識しながらも、そこに別の意味を付し、イメージ化し、同時に夜の盛り場としてそこを生きているのである。

### 3.3 マージナルなバリオ

既に聞き取り調査からわかったように、「永遠救済のマリア」<sup>ベルベト・マリア・ソコロ</sup>は他のバリオの住民からその地理的位置により遠い存在とだと捉えられ、「イスエラ川の向こう側にあるバリオ」と言われ、認識されている。同教会区の元司祭 (Gil 1966-1967:66) もこのバリオを分析し次のように述べている。

（『永遠救済のマリア』については）ウエスカ市では、日常的に「遠い」、「ウエスカ市の郊外にある」と表現されている。「永遠救済のマリア」からウエスカに対しても、「ウエスカに行く」という表現が聞かれる。つまり、これは明らかに「最果てに位置するバリオ」を表しているのである。川や橋を渡り、幹線道路を横切らなければならないというのは、社会学的な「隔たり」である。さらに同バリオの住民は近隣の村々の出身で、職工や肉体労働者として働いている。<sup>35)</sup>

上の掲載文が書かれた1960年代には、当バリオの住人の大多数が近隣の村々から移住してきたブルーカラーだったと考えられる。しかし、高学歴の人々も大学生も住んでいる現在でも、「永遠救済のマリア」に対する「職工のバリオ (barrio de los obreros)」、「最も貧しいバリオ (el barrio más humilde)」という表現が変わらず続いている。また、このバリオの距離的な問題は、心理的にもウエスカから遠い存在であるように捉えられている。筆者は、「韓国ほど遠いバリオ (barrio de Corea)」という表現も耳にした。こうした「レッテル」は、特に同バリオの外の者から発せられた表現である。

これらの表現、そしてその背後にある固定観念には賛同しないものの、同バリオの住民自身もその特異性を多かれ少なかれ認めている。例えば「近所の人同士の関係は親密である」、あるいは「夏になると通りや歩道に椅子を出してお喋りする『村的な風景』を目にするのは当たり前」などと説明し、彼らを感じる他のバリオとの相違を説明する。つまり、既に「バリオ＝教会区」という境界が存在するが、これが「自」と「他」の双方によって強められ、その境界がより明確になるのである。実際に、ウエスカでは大文字を語頭に「バリオ (Barrio)」と書かれてある場合、あるいは特定の名称を入れずに「バリオ」とだけ言う場合、暗黙の内に「永遠救済のマリア」を意味すると理解される。典型的な例として、市内を循環するバスには行き先としての「永遠救済のマリア」のことが大文字で始まる「バリオ」とだけ記されていることから確認できる。したがって、同バリオの住民による『『ウエスカ』に行く』という表現は、橋を越えて町中に入っていく行為であり、また同バリオの住人およびその他のウエスカの住

民が『『バリオ』に行く』とは、『『永遠救済のマリア』に行く』と解釈できるのである。このような会話は日常的によく聞かれる。

住人と外部者の双方から規定される空間ということで言えば、「永遠救済のマリア」だけでなく、ブルジョア的な『『バリオ』＝ポリゴノ』—「オリーブ畑」、「ポリゴノ25」、「ビレネー」、「聖ホルヘ」—もそうである。しかし「永遠救済のマリア」はそれらと基本的な性格を異にする。同バリオは、ウエスカ市当局とのコンフリクトから結束を固めてきた経緯をもつ「バリオ＝教会区」なのである。近隣組織の代表者（男性・40代）は次のように話してくれた。

我々の組織が設立された1970年代当時、このバリオ内には舗装道路は全くなかった。公共医療施設も設けられていなかった。また、このバリオに文化施設は長い間つくられてこなかった。多くの活動や闘争によって、いろいろなものを少しずつ獲得してきた。その辺をわかってもらうために例を出すと、市営の多目的施設<sup>36)</sup>…あれに関しては私たちは1979年から戦ってきたんだ。あの施設の獲得までに20年も要したんだよ。（傍点は筆者）

このように、「永遠救済のマリア」の住人は市当局と「戦う」ことで少しずつ生活環境を整え、バリオとしての結束を固め、アイデンティティを強めてきたのである。したがって、ブルジョア的な『『バリオ』＝ポリゴノ』のように宅地業者によって前もって与えたイメージに便乗するものではないことを確認したい。「永遠救済のマリア」の地理的な位置や、住人が属する社会階層によってのみではなく、生活環境の改善を目指す住人自身の主体的な行動や言動が、このバリオをマージナルなバリオとして特徴付けているのである。「ここは『ウエスカ』ではない」と断言する「永遠救済のマリア」の住人の発言にみられるように、概観のみでは理解しにくい独自のアイデンティティがみとめられる空間と捉えることが妥当であろう。

本節におけるこれまでの考察を踏まえて、住民の都市空間の捉え方をイメージ図にしたものが図2である。

ここで一つ問題提起をしたい。地理的に周縁に

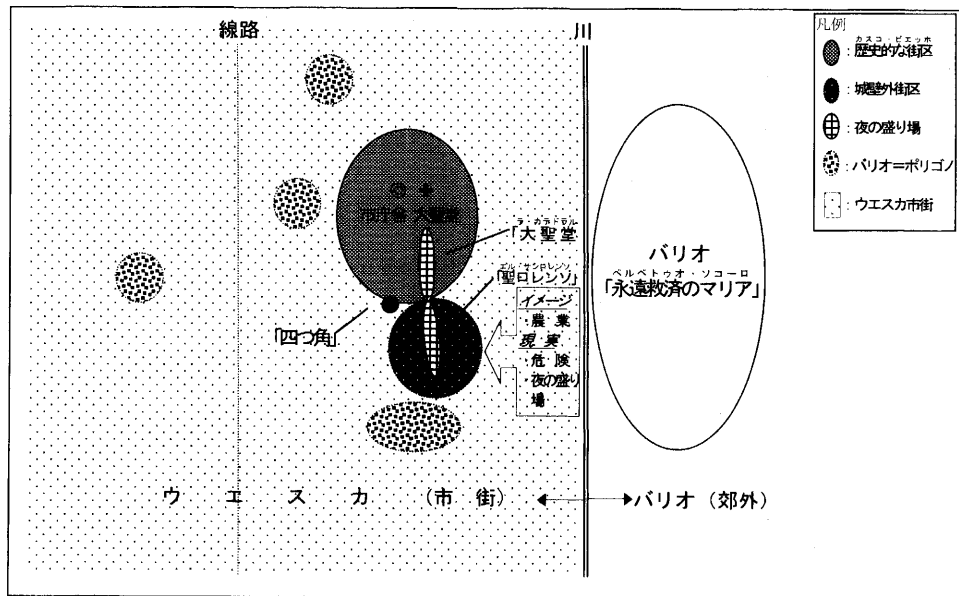


図2 住民が抱く現代ウエスカのイメージ図

位置する「バリオ＝教会区」であれば、「永遠救済のマリア」だけがマージナルなバリオではない。「権現のマリア」も同様の状況にある。前者はウエスカの東の端に、後者は西の端に位置し、ウエスカの他のバリオとはそれぞれ川、線路で区切られている。また、両地区には工場や倉庫が集中している。出身地別の住民の構成に至っては、「権現のマリア」におけるウエスカ市出身者の方が、「永遠救済のマリア」のそれよりも少ない<sup>37)</sup>。しかし、「権現のマリア」を「永遠救済のマリア」と同様にマージナルなバリオとみなしたり、特別だと語る人はほとんどいないことが聞き取り調査からわかっている。

この両バリオ間に存する印象の違いを単なる町の郊外という位置性だけではなく、住民が認識するウエスカの中心（「四つ角」）を中央に置き、東西に分けた空間の中を整理して考える必要があるだろう（表2）<sup>38)</sup>。表2には、主要な公共施設とブルジョア的な「バリオ」（『バリオ』＝ポリゴノ）、そして住宅街の外にある近年流行の大型スーパーの位置によって、問題になっている両バリオおよび町の東側と西側に分類されている。ここで気づくのは、まず、重要な公共機関は、現在使用されているものも過去の遺産と化したものも含めて、ほとんど町の西側に位置しているこ

表2：町の主要な公共施設の配置（西／東）

西 側	東 側
バリオ「権現のマリア」 工場・倉庫 「バリオ」：「聖ホルヘ」	バリオ「永遠救済のマリア」 工場・倉庫 刑務所 公立語学学校(EOI) 図書館（分室）
大型スーパーマーケット（2店）	
県庁舎 県知事官邸 州政府の支部 国家警察署 市警察署 高等技術専門学校（公立） 高等師範学校（3年制） 高等美術専門学校（公立） 中央図書館 旧公営市場* 旧公営蓄殺場 鉄道の駅 バスターミナル 「バリオ」：「ビレネー」 「バリオ」：「ポリゴノ 25」	サラゴサ大学の一部（3年制） 消防署 闘牛場
「バリオ」：「オリブ畑」	

\* 2002年に閉鎖され、現在ウエスカには公営市場はない。

とである。他地域とウエスカを繋ぐ交通機関も西側に見られる。また、経済的に豊かなイメージをもつ『バリオ』＝ポリゴノも、東西にまたが



るように広がる「オリーブ畑」を除いて、全て西側に点在している。ここから「永遠救済のマリア」と「権現のマリア」の違いは、町の東側と西側の意味の相違に関係していると推測される。そこで次節では、東西のイメージ形成を探るべく、ウエスカの都市空間形成の過程を歴史的に考察する。

#### 4. 都市空間形成に関する歴史的考察

ウエスカが「都市」として歴史上に現れるのは、ローマ帝国の一部として「都市オスカ (Vrbs Victrix Osca)」と称された時に遡る。「ウエスカ (Huesca)」という名称、および「ウエスカ市民」を表す語“oscense”の語源も、「オスカ」の名から派生している。ローマ時代にも城壁が存在したと推測されるが、その位置には複数の説があり、確かなことはわかっていない (Betrán 1992:60)。

「歴史的な街区」の空間は9世紀後半のイスラム統治下に建設された (Senac 1990:100) 旧城壁に囲われている。この要塞から都市は四方に拡大していき、現在のような形状に到っている。最初の動きは、1096年のウエスカにおける「レコンキスタ」終了後にみられた城壁外街区の形成 (Betrán 1992:66; Conte 1992:135-147; A. Naval 1990-a: 195-212) である。そこで本節では、前節まで述べてきた現在のウエスカの都市空間に直接関係する1096年以降に焦点を絞り、具体的に歴史的な3つのポイントを考察する。第一に、先に述べた城壁外街区の形成、第二に19世紀にウエスカでみられた近代化への一連の動き、そして第三に1960年代頃の工業化による市街地の拡大および郊外の形成についてである。

##### 4.1 城壁外街区の形成

1096年、「アルコラスの戦い (Batalla de Alcoraz)」でペドロⅠ世率いる軍がイスラム教徒の軍隊を破ったことで、ウエスカにおける「レコンキスタ」が完了する。ここで、都市空間は大きな変化を経験する (地図8)。まず、それまで城壁内に居住していたイスラム教徒は城壁の外に住むようになり、代わってキリスト教徒が城壁の中に入って統治を行うことになったのである。イスラム教徒とキリスト教徒の力関係が逆転すると、多くのイスラム寺院はキリスト教会あるいは修道院として利用されるようになった。イスラム教徒

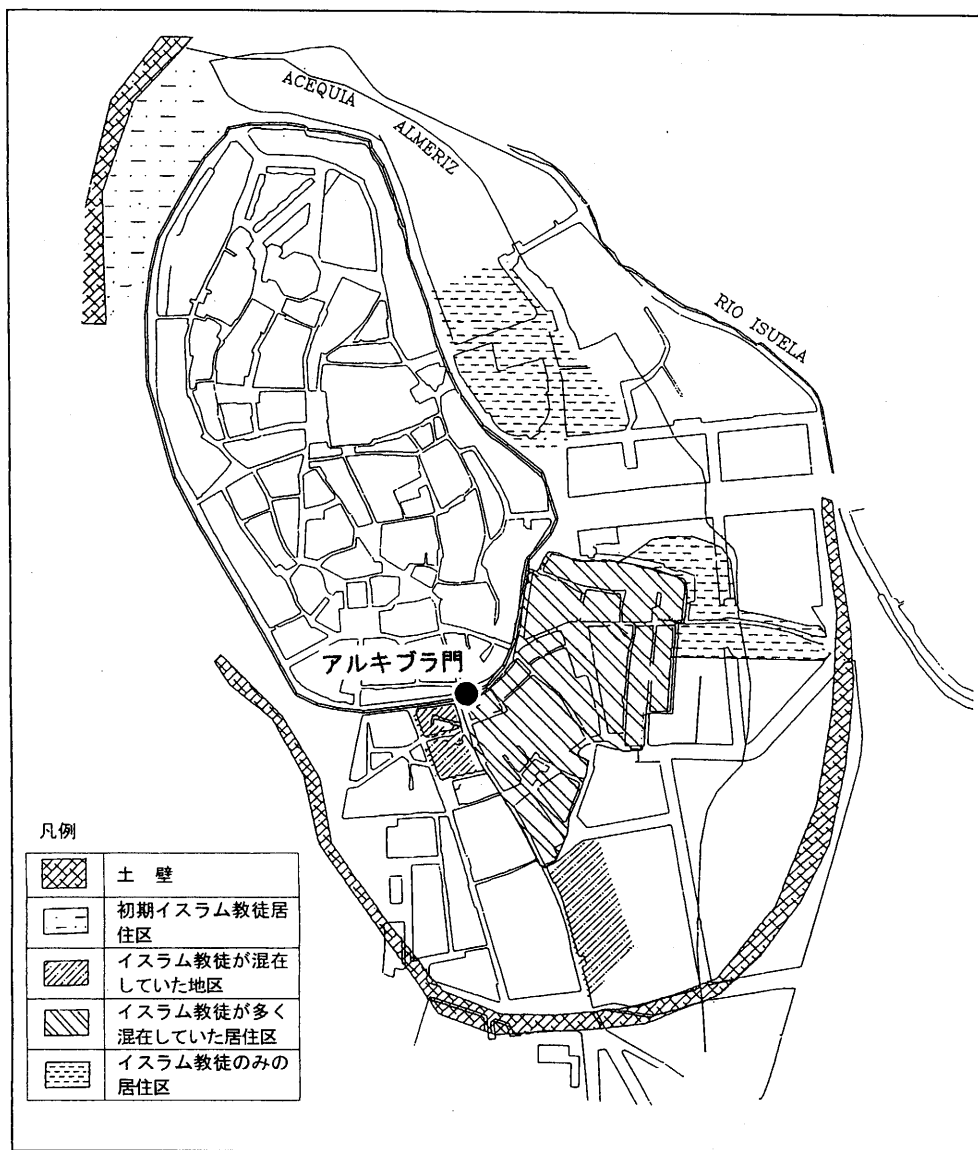
が城壁外に居住するようになったことで城壁外街区も拡張され、城壁の内と外を結ぶ門の数が増やされた。それらはイスラム統治下から存在していたものと新しくつくられたものを入れて9つあった<sup>39)</sup>。

ここで注目したいのは、アルキブラ<sup>40)</sup>門を城壁外に出た街区の形成についてである。門の名称をとって「アルキブラ」と呼ばれたこの街区には、権力者というより一般民衆の居住地で、キリスト教徒とイスラム教徒が共存する非常に動態的な地区であった。町の人口が最も多かったところでもある。また、商業、手工業などの産業が多々集まり、この街区に隣接して畑があったため農民もここに居住していた。アルキブラ門を出たすぐの場所には、町一番の市場が毎日正午に立っていて、19世紀に消滅するまで興隆をみたと言われている<sup>41)</sup>。したがって、城壁内街区には宗教的または行政的な権力が集中していたのに対し、アルキブラ地区は民衆の、あるいは都市における衣食住に関わる生活の空間であったと理解できよう。

城壁外街区はアルキブラ地区から南の方向へと拡大していった。それまで教会区は「大聖堂」と「聖ペドロ」の2つで、いずれも城壁内に位置していたが、13世紀には城壁外街区に「聖ロレンソ」と「聖マルティン」教会区ができる (Durán 1990:175)。この地区は常にウエスカで最も人口が集中していたところであり、その状況は現在でも続いている。

アルキブラ門から南に伸びる通り —現在の「聖ロレンソ通り」— は、18世紀まで「聖母サラス通り (calle de Salas)」と名付けられていた。聖母サラス礼拝堂 (Ermita de Nuestra Señora de Salas) は、町を南東方向に外れた麦畑の中に位置していて、そこには礼拝堂の名称どおりの聖母と共に「菜園の聖母 (Virgen de las Huertas)」も祀られている。礼拝堂は13世紀初頭に建てられ、特にその当時、聖母サラスはスペインの聖母信仰の中で重要なものの一つであった。聖母サラスに関する多くの奇跡は有名で、国内の各地 —特にアラゴン、カタルーニャ、バレンシア— からたくさんの巡礼者が訪れた。このような意味のある聖母の名称が付されていたということから、その通りの重要性を推し量ることができる<sup>42)</sup>。

その当時からこの通りのアルキブラ門近くには、ウエスカの守護聖人を祀った聖ロレンソ教会が建



地図8：中世ウエスカのイスラム教徒居住区（コンテ (CONTE CAZARRO 1993: 136) を基に筆者作成）

てられていた。さらに「聖母サラス通り」を城壁内に延長させると、大聖堂および市庁舎に到り、その途中にロマネック建築の聖ペドロ教会が位置していることが確認できる<sup>43)</sup>。ここに一つの重要なラインが浮かび上がる。つまり、人々が毎日食料を求めるウエスカ最大の「アルキブラ市場」、町の守護聖人が祀られた聖ロレンソ教会、そして人口、産業、異なる宗教を信仰する人々が集まっている動態的なアルキブラ地区がほぼ一直線に結ばれ、近代化以前のウエスカにおける日常生活お

よび宗教生活の中心線とも捉えられるラインを形成しているのである。これは城壁内にやはり直線的に続き、アルキブラ門を結節点として権力の象徴でもある大聖堂と市庁舎、キリスト教信仰のシンボルである聖ペドロ教会と結ばれている。

#### 4.2 19世紀の近代化

ウエスカの都市空間の変遷における次の鍵となる変化は、19世紀前半に行われた永代所有財産の開放 (desamortización) と県政区分

(demarcación provincial) の施行である。

まず、永代所有財産の開放により、「レコンキスタ」後の12世紀から18世紀にかけて建設されてきた宗教施設は、刑務所、公立学校、軍の施設のような市や県の行政が管理する公共施設として使用されることになった。このことは、1354年に設立されたウエスカ大学<sup>44)</sup>に大きな影響を与えた。つまり、修道院は大学の付属機関である学校を兼ねているところが多かったのも、それらの多くが閉鎖されると大学自体の存続も危うくなったのである。結果的に大学は1845年に閉校に追い込まれた。その後、ウエスカには現在まで新たな大学は設立されていない。

永代所有財産の開放に続くウエスカの地図に大きな影響を与えたのは、1834年に施行された県政区分であった。これによりウエスカは県の県都となり、県行政に関する諸々の機関を起動させるために新しい施設が必要となった。そこで永代所有財産の開放により公共利用の下に置かれた修道院などがそれに当てられた。このことは都市の景観に直接変化をもたらすものではないが、同空間の占有者がかわり、その使用目的が変更され、時にはよりモダンな建物に変化したことを意味する。宗教的権力よりも市当局の力が優位に立ったという価値の変化でもある。例えば聖フランシスコ修道院は改築され県庁に、カルメル(靴履き)会修道院(Calmeritas Calzados)は刑務所に、カルメル(跣足)会修道院(Calmeritas Descalzados)は一般教育学校になった。

これを機に、それまでのウエスカの社会において重要なポイントを結んでいたラインにも変化が起こる。まず、メインストリートの「コソ通り」が東に延長された。これにより、町最大の市であった「アルキブラ市場」は消滅する。その後、公営市場は1856年に旧城壁内市街地の領域に位置する「市場の広場(Plaza del Mercado)」—現在のロペス・アユエ広場(Plaza de López Allué)—に移された。つまり、都市住民にとっての生活の中心の場が移動したことになる。

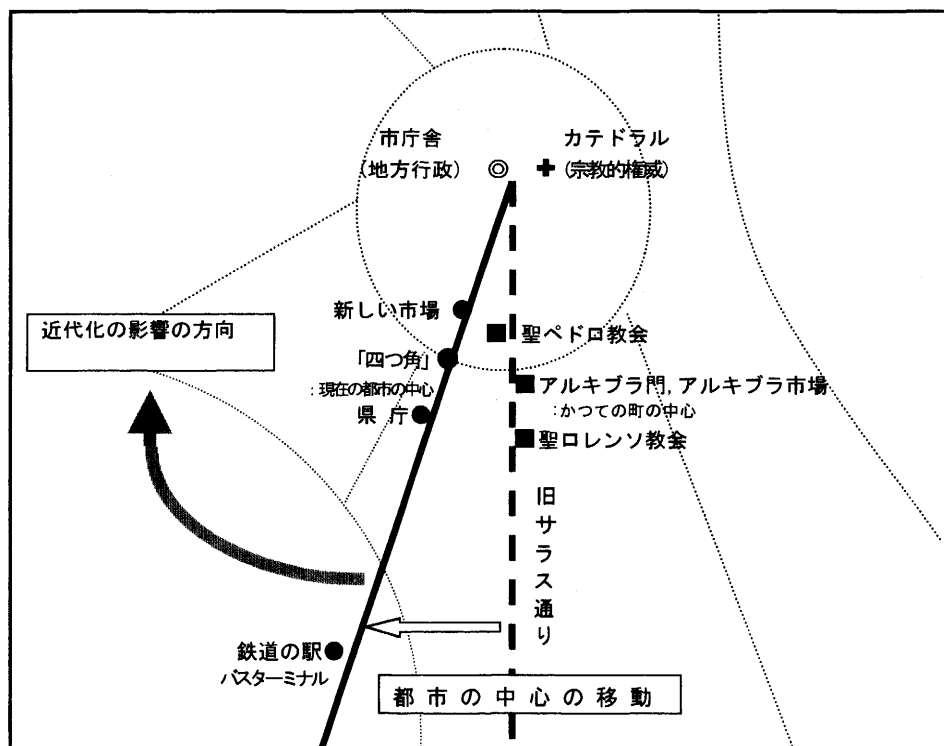
公営市場から「ピリャ・エルモサ公爵夫人通り(calle de Duquesa Villahermosa)」を通るとメインストリートの「コソ通り」にぶつかる。そこが「四つ角」である。「コソ通り」をわたって「ピリャ・エルモサ公爵夫人通り」の延長部分のごとく南に直線的に伸びているのは、「ガリシアのアー

ケード(Porches de Galicia)」と「サラゴサ通り(calle de Zaragoza)」である。これらの通りを結ぶラインはウエスカにおける近代化を意味していると捉えることができる。なぜなら、「ガリシアのアーケード」には県庁が位置し、サラゴサ通りには近代の象徴とも言える鉄道の駅が建設されたからである<sup>45)</sup>。したがって、アルキブラを核とする前近代時代の中心ラインは、鉄道の駅、県庁舎、「四つ角」、新しい市場を結ぶ近代を象徴するようなラインに取って代わられたことになる(図3)。このラインはやはり直線的に大聖堂と市庁舎につながる。現在ウエスカの中心とみなされる「四つ角」であるが、その歴史性はそれほど古くなく、近代を象徴する施設が並ぶ線上に位置する、いわば近現代ウエスカの中心点なのである。

#### 4.3 新市街地の拡大と郊外の形成

歴史家ナバル・マスによれば15世紀から18世紀までは町の形状自体は13世紀の時点から比べてそれほど変化はなく、規模の拡大もほとんど見られなかった(A. Naval y J. Naval 1979:28-29)。19世紀にもウエスカは都市空間の大幅な拡大は経験しなかったが、前項で述べた通り、宗教中心から行政中心に社会が再構成されていく構造的な変化が起こっていた。それに伴い、町の中心「四つ角」と鉄道の駅を結ぶラインの周辺に位置する建物や広場の整備が行われていった。

20世紀の後半に入ると、ようやく郊外の形成につながる大きな都市空間の拡大が見られるようになる。その原因となったのは1960年代の工業化による他地域からの人口流入であった。第3節3.1で詳述した通り、この人口の急激な増加に呼応して新しく教会が建設され、住民の宗教生活を支える教会区がつくられた。13世紀以降ウエスカには新しい教会区は設けられなかったが、1968年に「永遠救済のマリア」<sup>ペルベト・ウ・ソ・ゾ・コ</sup>教会が建設され同教区が定められた。これがウエスカで最初の「郊外(Ensanche)」となる。その3年後に町の北西に「聖サンティアゴ」教会および教会区が、さらに4年後には「聖サンティアゴ」教会区から線路を越えた西側に「権現のマリア」<sup>ラ・エンカルナシオン</sup>教会と教会区がつくられた。その後設けられた「聖母アウキシリアドーラ」と「聖ホセ」は、位置的に見て「聖サンティアゴ」から分かれた教会区だと考えてよい。このようにウエスカにおける20世紀の都市の拡



\* 細い点線はバリオ＝教会区の境界

図3 町の中心ラインの移動と近代化の進行方向

大は、外部から流入してきた工場労働者によってもたらされた現象なのである。それはまず東側から始まったが、その後人口は西側に集中して増加していったのである。

近代以降に建設された道路は一般に直線的で車両通行にも適応した幅を有している。ウエスカの場合もこの特徴がみられるが、特に町の外へ伸びる幹線道路に繋がるように道路網が整備されているのは西側の地域である<sup>46)</sup>。また、緑地の概念を取り入れた大きな公園<sup>47)</sup>も西側に位置している。表2で分かる通り、近代以降につくられた公共施設に関してもその多くが町の西側に見られる。

このような西側に偏重した開発や発展を町の中心ライン (図3) と考え合わせてみると、前・近代の中心ラインの移動後、「四つ角」を中心とする近代化を象徴するラインは20世紀を通じて時計の針の運動のように動き、近代化の影響の範囲を拡大してきたという軌跡をイメージすることができる。この「時計の針」は長さを伸ばし、鉄道

の線路を越えたバリオ「<sup>ラ・エンカルナシオン</sup>権現のマリア」にまで到達していたのである。十数年前に行われた同バリオの祭りのパンフレットには当時の近隣組織の代表者から「我々は、マージナルなバリオから抜け出した。今や、ほぼ町一番のバリオである」という挨拶文も載せられていた。「<sup>ラ・エンカルナシオン</sup>権現のマリア」が地理的にマージナルな状態にあっても社会的なマージナルと感じられないのは、ここが都市の西側に位置していることに関係しているのである。決して住人が生活改善に無関心とは思わないが、「<sup>ベルベトウツァン・ソコロ</sup>永遠救済のマリア」の場合とは異なり、開発や発展の波は自然に「<sup>ラ・エンカルナシオン</sup>権現のマリア」に及んだはずで、「ウエスカ」から分断されているというマージナルなイメージの払拭のためには運動を起こす必要があまりなかったと考えられる。「<sup>ラ・エンカルナシオン</sup>永遠救済のマリア」内にはブルジョア的な「バリオ」が形成されなかったのに対し、「<sup>ラ・エンカルナシオン</sup>権現のマリア」内には「<sup>ラ・エンカルナシオン</sup>聖ホルヘ」があることからイメージの違いがわかるだろう。地元の建

築家も「理由はよくわからないが、新しい技術やシステムを取り入れた建物は『永遠救済のマリア』には計画されない」と語るほどなのである。

## 5. おわりに

ウエスカにおける開発、発展の流れはその後西側方向に偏重することを止めず、町の東側はある意味で取り残されていく。確かに東側の郊外に位置するバリオ「永遠救済のマリア」には、他のウエスカのバリオと比較すると重要な公共機関がほとんど見られず、他のバリオに遅れをとっているようにみえる。しかし、生活環境一般としては学校も病院もある程度の商店も揃っていて、最近では多目的施設も建設された。これは住人の市当局に対する働きかけにより獲得した環境である。そこには単なる社会的にマージナルな「事実」だけが存在しているのではなく、マージナルなイメージを使って運動を起こし、市当局から最大の利益を獲得するという戦略があると筆者は分析する。実際に一般のバリオ住人は、「永遠救済のマリア」の独自性を認めながらも生活環境で何ら不便さを感じる発言はしていなかった。それでも近隣組織の中心人物は「ウエスカ」とは異なる「永遠救済のマリア」の周縁性と独自性を強調し、「今まで住民の手でいろいろなものを獲得してきたし、まだ改善すべき点が多い」と断言するのは、彼らのポリティクスであり、この実践がこれまで成功を収めているのも事実である。ウエスカ市内の一つのバリオとして「永遠救済のマリア」を考えると、行政関係の重要な機関は揃っておらず、また高級感のある家屋が見られないものの、生活レベル全般の施設は整っており一つの村のような存在になっていることに気づく。地理的、社会的にマージナルなイメージに反した「永遠救済のマリア」のこの現実が、「生きられた」都市空間を把握する上で注目すべき点なのである。

「永遠救済のマリア」の主體的な動きに対して、旧市街地の旧城壁外街区の活気は低迷を維持したままである。バリオとしては「聖ロレンソ」と「聖ドミンゴー聖マルティン」に入るが、活動の中心となる人々が新市街地に居住しているせいか、旧市街地における生活環境の悪さは常に指摘されるものの、市当局を動かすまでには到っていない。最近の旧市街地の再開発も旧城壁内街区では市庁

舎、旧城壁外街区では「四つ角」の近くで行われており、いずれも町の西側になる。本論で見てきたとおり、旧城壁外街区の東側 —特に夜の盛り場と化す地帯— はウエスカにおいて守るべき農業文化の象徴的な場であった。ここは普段の放置され荒廃した現状に反して、年に一度、守護聖人祭のときに重要な役割を果たす<sup>48)</sup>。守護聖人が祀られた教会およびその周辺が祭りの中心舞台となり、農耕に関わる伝統舞踊などを通してウエスカの住民のアイデンティティが表出される場に変化するのである。つまり、近現代的な意味で放置され続けてはいるが、人々の中で場の歴史性あるいは象徴性は知覚され続けていると行うことができる。

以上、住民によって生きられ知覚されるウエスカの都市空間を歴史のおよび現在の考察してきた。本論は多くの課題を残してはいるが、住民の言説の聞き取りや彼らの行動の観察を駆使して、エティックの視点からの単純な分析とは異なり、そこに生きる主体の視点から認識される都市空間を導き出し、その歴史的な形成を明らかにできたと思う。イメージの上のみで重要な空間であっても、市当局との交渉によってイメージ化された空間であっても、そこには歴史に裏打ちされた人々の想いや実際の生活が関わっていて、それを抜きにしては都市空間を捉えきれないのである。

## 謝辞

本論の作成にあたり、ヨーロッパ民族学研究会の法橋量氏に多くの指摘やアドバイスをいただいた。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

## 付記

本論の作成には、1997年度グラシアン基金助成(Programa “Baltasar Gracián”)の一部を使用した。

## 注

- 1) 「小屋を環状に配置することは、社会生活や儀礼の慣行にとって極めて重要な意味をもってくるので、ダス・カルザス河地方のサレジオ会の宣教師たちは、ボロロ族を改宗させるのに最も確かな遣り方は、彼らの集落を放棄させ、家が真直ぐ平行に並んでいるような別の集落に移すことにある、ということを直ぐに理解した」。(レヴィ＝ストロース 1955=2001: 49)

- 2) 吉見は、初期シカゴ学派の都市研究にはこのような人類学的まなざしのみでなく、「空間」と「社会」の関係性を二分法的に捉える枠組みが混在していることを論じている。(吉見 2002:51)
- 3) パス (paths) は、街路、散歩道、運送路、鉄道、運河などで、パスではない線状の要素であり、川や海岸あるいは壁など二つの空間の境界を成すものがエッジ (edges)。ディストリクト (districts) は、人に共通の認識をもたせる二次元的な広がりであり、パスの交差点のように都市内部の主要な点がノード (nodes) である。そして、ランドマーク (landmarks) は、外部から見られる地点を示す。
- 4) フンバンに関しては和崎を、クマシに関しては阿久津の論文を参照されたい。(和崎 1982: 153-163; 和崎 1986: 170-178; 阿久津 1987: 123-141)
- 5) セルトーは次のように述べ、現代の空間研究には実践への着目が求められていることを指摘している。「かつて言語システムに次いで、言語の実現にかかわる意味形成の実践が考察の対象になったのとおなじように、今日では空間秩序のコードと分類法の検討に次いで、空間を形成するさまざまな実践が注目されている。われわれの研究は、構造から行為へと移行しているこの『第二』期の分析に属している。(中略) 物語的行为の検討をとおして、空間を組織化する実践の基本的形態のいくつかをあきらかにすることができるであろう」。(ド・セルトー 1987:241)
- 6) ある程度の人口をもつ集落を任意に分けた区のこと。ここでは、行政から定められた区画ではなく、自治会に当たる近隣組織が存在するある程度の空間的範囲と人口を有した区のこと。同じ「バリオ」という語を使ってもコンテクストによって意味する範囲が異なる (注24参照)。
- 7) ルフェーヴルは社会空間の生産を解き明かす方法概念として「空間的实践」、「空間の表象」そして「表象の空間」の三つを提示している。敢えてごく簡単に説明すると、「空間的实践」は、各社会に固有な生産と再生産の場所を創出・編成する実践で、現実の生産と再生産の諸関係を場所や空間に映し出し、それらの関係を創出する。例として郊外の空間、都市交通網の創出がそれに当たる。「空間の表象」は、空間を秩序化するものであり、都市計画によって構想される空間がそれに当たる。「表象の空間」は、直接に生きられる経験の空間領域で、芸術家が作品を通して自己表現する空間であり、居住者が生活を営む空間でもある。(ルフェーヴル 2000: 82-83; 斎藤 2000: 621-627)
- 8) スペインにおける「空間の表象」について論じた研究としては、地理学の立場から栗原がバルセロナの近代都市空間創出に関して興味深い論文を発表している。そこでは空間を創り出した都市計画の理念が緻密に分析され整理されている (栗原 2001:174-211)。筆者のウエスカの研究は、現時点ではこのような研究と同等に「空間の表象」を論じられるほど整理されていないため、その限界を言及せざるを得なかった。
- 9) この指摘に加え、同論文では各国の人類学的研究全般においても空間のテーマがさほど問題視されていない点、そして主題として取り上げられていても非常にメンタルな分析に陥ってしまう点を省察している。(Martínez 1991: 235)
- 10) 原文は1979年に出版されている。
- 11) 原文は1983年に出版されている。
- 12) それまでスペイン人研究者が都市で人類学的なフィールドワークを行わなかったわけではない。筆者がここで強調したいのは、当論稿が書かれる以前には都市という空間が意識的に問題にされ、大きく取り上げられてこなかった点である。
- 13) 2003年1月統計
- 14) 下の文献を基にして算出した1960年、1975年、1989年における産業別就労人口の推移は、概数で次の通りである。第一次産業＝26%、8%、4%。第二次産業＝27%、31%、22%。第三次産業＝47%、61%、74%。少々古い資料ではあるが、この産業構造は現在も続いていると充分推測できる。(Callizo y Catán 1990:483)
- 15) コソ (Coso) とは元々「囲い地」を意味している。アラゴン地方では大通りのことを指すことが多い。ウエスカでは厳密には、コソ通り全長のほぼ中央の基点から西～北に伸びる部分は「高コソ通り」(Coso Alto)、東へ伸びる部分は「低コソ通り」(Coso Bajo) と称されている。
- 16) 中世には城壁同様、町全体を保護する意味で、土製の壁も集落の終わりに建設された。(地図8参照)
- 17) ウエスカの住人は通常ここを「豚の広場 (Plaza de los Tocinos)」とかつての名称で呼び続けていて、現在の正しい名称を知らないものは多い。
- 18) 馬車や作業車の出入り用の大きな扉に付けられた人や家畜が通れるほどの幅の扉のこと。
- 19) Plan General de Ordenación Urbana. Avance 1994 による。
- 20) カウンター式の酒場。カウンターとは別にテーブルが設置されている場合も多い。
- 21) ディスクジョッキーはおらず、ミラーボールや特別な照明も設置されているとは限らないが、常に音楽がかなりのボリュームでかけられている酒場のこと。
- 22) 「権現のマリア」には手術が可能な大病院、

- 「<sup>ベルベトッソ・ソコーロ</sup>永遠救済のマリア」には県立の病院と精神病院がある。
- 23) ウエスカでの都市計画区分は1957年に始められた。
- 24) ここではこれまで用いてきたバリオの意味とは異なり（注6参照）、都市の一ブロックやそれがいくつか集まったようなより狭い範囲を指す。この意味で同語を用いる場合、以下、鍵括弧を付けて「バリオ」とする。
- 25) 各名称の由来は次の通りである。「ポリゴノ25」は文字通り都市計画図のポリゴノ25番に当たる。「オリブ畑」とは開発前、当地にはオリブ畑が広がり、その周辺が昔からそう呼ばれていたからである。「ピレネー」は、同「バリオ」内にある並木道の名前で、「聖ホルヘ」は業者がつけた名称である。「聖ホルヘ」は、同名の聖人を祀った礼拝堂がある丘が近くにあることからつけられた名前であろう。
- 26) それぞれ「ピレネー（Pirineos）」、「聖グリアル（Santo Grial）」、「永遠救済のマリア（Perpetuo Socorro）」の名称がつけられている。
- 27) スペインの義務教育は6才～16才までで、12才までは基礎一般教育（EGB）、その後は総合中等教育（BUP）になるが、大学進学希望者はその上さらに大学予科コース（COU）に通う必要がある。ウエスカの教育関係者によると、学区域が決められているのは義務教育のうち基礎一般教育のみで、中等教育以上の学校選択には厳しい規則はない。
- 28) その他にキリスト教系の私立学校が4校あるが、当然のことながら学区域は設けられていない。
- 29) 結婚式や葬式も宗教上重要な儀礼であるが、それらが行われる教会は当事者の自由選択が可能である。
- 30) スペインでは必ずしも「バリオ＝教会区」の図式が成り立つわけではないので、ウエスカのケースに驚きを示す研究者もいる（Lisón 1993-b:94）。例えばウエスカ県内の小都市バルバストロではバリオと教会区は全く別の名称とスケールをもつ区分である（Mairal 1995）。
- 31) 日本の自治会のような団体のこと。ウエスカ市では1992年に市民参加の条項（Participación Ciudadana）が整えられて以降、全バリオの代表者を通して生活環境の問題解決に臨んでいる。つまり、それ以前は市との特別な話し合いの場は設けられておらず、各バリオの近隣組織を通して任意に訴えや要求が提出されていた。市民参加条項におけるバリオとは同地区内に存在する複数の団体（スポーツクラブやレクリエーション・クラブなども含む）から成り立っているが、ここで言う近隣組織はその中心的役割を担っていて、実質的にバリオのイニシアティブをとる。
- 32) この街区内には2つの近隣組織があり、Asociación de Vecinos y Amigos del Casco Viejoが1987年に、Asociación de Vecinos y Comerciantes del Casco Viejoが1988年に設立されている。
- 33) 注32に挙げた旧城壁内に現存する2つの近隣組織の内、Asociación de Vecinos y Amigos del Casco Viejoの方を指す。
- 34) 表1から、住民の平均年齢が最も高いのが<sup>フ・カサドゥル</sup>「大聖堂」と「聖ベドロ」で、少ない若年層に対して、高齢層の割合が非常に高いことがわかる。その理由として、建物の古さ、不便さ、そして狭さが指摘される。当街区の住人の子どもたちは結婚して家庭をもつと、新市街地のより広く、モダンな建物に住居を構えるので、改築されない限り<sup>カスコ・ベテラノ</sup>「歴史的な街区」に若者が移り住んでこないのである。
- 35) カッコ内は筆者が捕捉した。
- 36) 当多目的施設は1998年に建設された。
- 37) 1996年の統計によると、<sup>ベルベトッソ・ソコーロ</sup>「永遠救済のマリア」におけるウエスカ出身者が当地区全体の人口の79.78%であるのに対し、<sup>フ・エンカルナシオン</sup>「権現のマリア」では70.56%である。
- 38) この表には旧市街地は含まれていない。旧市街地については、既に本節2項で分析されている。
- 39) シルカタ（Sircata）、モンテアラゴン（Montearagón）、アルキブラ（Alquibla）、ラミアン（Ramían）、ペトレア（Pétrea）、アルパルガン（Alpargán）、フォティス（Fotis）、ヌエバ（Nueva）、エル・カルメン（el Carmen）の9つの門である。このうち、シルカタ、ペトレア、アルキブラ、ラミアン門は、四方位の基点となるように、それぞれ楕円形の要塞の弧の北、東、南南東、西の方角に位置しており、イスラム統治下から存在していたと考えられている。
- 40) アルキブラ（Alquibla）とはアラビア語で「メッカの方向」や「正午」を意味する。
- 41) その広場は当時のウエスカにおいて中心的な広場であり、1646年の条例によると「町で最も交流がある場」であった。（A. Naval Más 1990-b:318）
- 42) この通りは18世紀までは確実に「聖母サラス」と呼ばれていた。1870年の時点では「聖ロレンソ通り」に変えられているが、変更の正確な年はわかっていない。（A. Naval y J. Naval 1978: 36）
- 43) 教会の立地で町を構造的にみると大聖堂、聖ロレンソ教会、聖ベドロ教会を結ぶ一つの線が現れる（Betrán 1992:173.）。聖ベドロ教会は、イスラム統治下にも改宗せずにいたキリスト教徒（モサラベ mozárabe）の拠点であり、ウエスカでは宗教的な象徴としても重要な意味をもった教会である。
- 44) 大学設立は1354年だが、現在残されている八角形の特徴的な校舎は1690年から20年間かけて建設されたものである。

- 45) ウエスカで最も古い鉄道と駅舎が完成したのは、1864年のことである。
- 46) Plan General de Ordenación Urbana, Avance 1994
- 47) ウエスカで「公園」と言えば西側にある公園のことを指す。この公園は1920年代につくられた小さな公園を基礎にしているが、緑地の概念および現在に到る大規模化は1960年代から70年代にかけて行われた一連の計画によるものである。
- 48) 詳細は拙稿を参照されたい。(竹中 1996-b:3-14)

#### 引用・参考文献

- 阿久津昌三 (1987) 「クマシーアフリカの都市」, 藤田弘夫・吉原直樹編『都市—社会学と人類学からの接近』ミネルヴァ書房
- アバデュライ, A. (2004) 門田健一訳『さまよえる近代—グローバル化の文化研究』, 平凡社
- 市川浩 (1982) 「身体・家・都市・宇宙」, 大江健三郎・中村雄二郎・山口昌男編集代表『叢書文化の現在2・身体の宇宙性』岩波書店
- 今里悟之 (2004) 「景観テキスト論をめぐる英語圏の論争と今後の課題」『地理学評論』Vol.77 No.7 日本地理学会
- 奥出直 (1987) 「ワシントンD.C. —アメリカの都市」藤田弘夫・吉原直樹編著『都市・社会学と人類学からの接近』ミネルヴァ書房
- 樺山紘一 (1984) 「空間としての都市」樺山紘一・奥田道大編『都市の文化』有斐閣
- ギデンズ, A. (1993) 松尾精文、小幡正敏訳『近代とはいかなる時代か—モダニティの帰結』, 而立書房
- 栗原尚子 (2001) 「19世紀後半のパルセロナ市における近代的都市空間の創出」竹内啓一編著『都市・空間・権力』大明堂
- 小林忠雄 (1985) 「伝統都市の民俗社会構造」中村孚美編『現代の人類学—都市人類学』至文堂
- 小林忠雄 (1990) 『都市民俗学—都市のフォークソサエティ』名著出版
- 斎藤日出治 (2000) 「解説：空間の生産の問題圏」H. ルフェーブル／斎藤日出治訳『空間の生産』青木書店
- シヨエ, F. (1985) 福井憲彦訳「都市を見る眼〔都市計画における歴史と方法〕」二宮宏之他編『都市空間の解剖』新評論
- 陣内秀信 (1995) 『都市の地中海—光と海のトポスを訪ねて』NTT出版
- 竹中宏子 (1996-a) 「聖人祭のプロセッションに関する一考察」『スペイン史研究』第10号
- 竹中宏子 (1996-b) 「聖ロレンソ祭に現れる『ウエスカ像』—日常と祭りの生活空間を通して」, 『生活学論叢』Vol.1, 日本生活学会

- ド・セルトー, M. (1987) 『日常実践のポイエティーク』, 国文社
- ハーヴェイ, H. (1991) 『都市の資本論—都市空間形成の歴史と理論』青木書店
- ベック, U., ラッシュ, S., ギデンズ, A. (1997) 松尾精文、叶堂隆三、小幡正敏訳『再帰的近代化—近現代における政治、伝統、美的原理』, 而立書房
- ボルノウ, O. F. (1978) 大塚恵一・池田健司・中村浩平訳『人間と空間』, セリカ書房
- 吉見俊哉 (1987) 『都市のドラマツルギー—東京・盛り場の社会史—』弘文堂
- 吉見俊哉 (2002) 「グローバル化と脱—配置される空間」『思想』1月号, 岩波書店
- 吉原直樹 (1987) 「現代都市と都市社会学の展開」藤田弘夫・吉原直樹編著『都市・社会学と人類学からの接近』ミネルヴァ書房
- リーチ, E. (1981) 青木保・宮坂敬造訳『文化とコミュニケーション』紀伊國屋書店
- リンチ, K. (1968) 丹下健三・富田玲子訳『都市のイメージ』岩波書店
- リンチ, K. (1974) 東大大学院研究室訳『時間の中の都市』鹿島出版会
- ルフェーブル, H. (2000) 斎藤日出治訳『空間の生産』青木書店
- レヴィ=ストロース, C. (1955=2001) 川田順三訳『悲しき熱帯・II』中央公論社
- 和崎春日 (1982) 「西・中部アフリカの首長制社会—カメルーン・バムン王制社会の政治類型上の位置づけ—」池野茂・白石太良・杉本尚次・中村泰三・宮井隆・和崎春日共著『世界の空間認識』晃洋書房
- 和崎春日 (1986) 「アフリカ首長制社会における都市の諸性格—カメルーン国・バムン族の都市・フンパンの王都性をめぐって」中村孚美編『現代の人類学—都市人類学』至文堂
- 和崎春日 (1987) 「現代都市と都市人類学の展開—地域人類学とエスニシティの視覚—」藤田弘夫・吉原直樹編著『都市・社会学と人類学からの接近』ミネルヴァ書房
- BETRÁN ABADÍA, Ramon (1992) *La forma de la ciudad. Las ciudades de Aragón en la Edad Media*, Delegación en Zaragoza del colegio oficial de arquitectos de Aragón.
- BRIOSO MAIRAL, Julio (1986) *Las calles de Huesca*, Guara Editorial.
- CALLIZO SONEIRO, J. y CASTAN PUEYO, C. (1990) “Geografía de la ciudad de Huesca a comienzos de los años 90” C. Laliena Corbera (coord.) *Huesca: Historia de una Ciudad*, Excmo. Ayuntamiento de Huesca.
- CÁTEDRA TOMÁS, María (1997) *Un santo para una*



- ciudad, Ariel.
- CONTE CAZCARRO, Ánchel (1992) La Aljama de moros de Huesca, IEA.
- DURÁN GUDIOL, Antonio (1990) "La iglesia, la cultura y el arte medievales en Huesca", C. LALIENA CORBERA (coord.) *Huesca. Historia de una ciudad*, Ayuntamiento de Huesca.
- GIL, Ramón (1966-1967) "Barrio de la parroquia de Nuestra Señora del Perpetuo Socorro" en *Argensola, Tomo XVII, Núm. 61-64*, IEA.
- KENNY, Michael & KNIPMEYER, Mary C. (1983) "Urban Research in Spain: Retrospect and prospect. in Kenny & Ketzer (eds.) *Urban Life in Mediterranean Europe*, Illinois University Press.
- KENNY, Michael & KNIPMEYER, Mary C. (1991) "Investigación urbana en España: visión retrospectiva y prospección" *Antropología de los pueblos de España*, Taurs.
- LISÓN ARCAL, J.C. (1993-a) "Prólogo", J.C. Lison Arcal (ed.) *Espacio y cultura*, Editorial Coloquio
- LISÓN ARCAL, J.C. (1993-b) "La construcción cultural del espacio urbano en Huesca." J.C. Lisón Arcal (ed.) *Espacio y cultura*, Editorial Coloquio.
- MAIRAL BUIL, Gaspar (1995) *Antropología de una ciudad: Barbastro*, IAA.
- MARTÍNEZ, Ubaldo (1991) "Organización y percepción del Espacio", J. Prat, U. Martinez, J. Contreras e I. Moreno (eds.) *Antropología de los pueblos de España*, Taurs.
- NAVAL MÁS, A. y NAVAL MÁS, J. (1978) *Huesca. Siglo XVIII*, Caja de Ahorros de Zaragoza, Aragón y Rioja
- NAVAL MÁS, Antonio (1990-a) "El urbanismo medieval (siglo XII al XV). Huesca, ciudad fortificada", C. LALIENA CORBERA (coord), *Huesca. Historia de una ciudad*, Ayuntamiento de Huesca.
- NAVAL MÁS, Antonio (1990-b) "Las transformaciones urbanísticas (Siglo XVI al XIX)", C. LALIENA CORBERA (coord.) *Huesca. Historia de una ciudad*, Ayuntamiento de Huesca.
- NAVAL MÁS, Antonio (1997) *Huesca, ciudad fortificada*, Ibercaja.
- PRESS, Irwin (1979) *The City as Context: Urbanism and Behavioral Constraints in Seville*, University of Illinois Press.
- PRESS, Iwan (1991) "La ciudad como contexto", J. Prat, U. Martínez, J. Contreras e I. Moreno (eds.) *Antropología de los pueblos de España*, Taurs.
- SÁNCHEZ PÉREZ, Francisco (1990) *La liturgia del espacio*, Nerea.

SÉNAC, Philippe (1990) "La ciudad más septentrional del Islam" C. LALIENA CORBERA (coord.) *Huesca. Historia de una ciudad*, Ayuntamiento de Huesca.

#### 参考資料

- Boletín Oficial del Obispado de Huesca, Año 114, mayo de 1965, No.5.
- Boletín Oficial del Obispado de Huesca, Año 117, mayo de 1968, No.5.
- Boletín Oficial del Obispado de Huesca, Año 121, junio-agosto de 1972, No.7-8.
- Boletín Oficial del Obispado de Huesca, Año 129, noviembre-diciembre de 1980, No.11-12.
- Boletín Oficial del Obispado de Huesca, Año 132, enero-febrero de 1983, No.1-2.
- Plan General de Ordenación Urbana. Avance 1994

---

たけなか ひろこ

お茶の水女子大学大学院 人間文化研究所